HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アルタイ諸言語と朝鮮語、日本語におけるいわゆる「再帰代名詞」の対照研究
Author(s)	風間, 伸次郎
Citation	北方言語研究, 8, 23-58
Issue Date	2018-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68727
Type	departmental bulletin paper
File Information	02kazama.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 8: 23-58（北方言語ネットワーク編，新潟大学人文学部，2018）

アルタイ諸言語と朝鮮語、日本語におけるいわゆる「再帰代名詞」の対照研究

風 間　伸 次 郎
（東京外国語大学）

0. はじめに

本稿の目的はアルタイ諸言語と朝鮮語、日本語におけるいわゆる「再帰代名詞」の対照を行うことである。5 節では特にアルタイ諸言語に関して、同系統の言語群における再帰代名詞の分布や機能、歴史についても概観する。

アルタイ諸言語に関しては、チュルク諸語からトルコ語、モンゴル諸語からハルハ・モンゴル語（以下単にモンゴル語と呼ぶ）、ツングース諸語からナーナイ語を取り上げることにする。朝鮮語と日本語を含め、本稿におけるこれら 5 つの言語を一括して指す場合には、「対象諸言語」と呼ぶことにする。

再帰代名詞は一般に主語に照応するものを指すが、いわゆる強調用法（1 節を参照）では、主語そのものを強調するものや、主語以外の先行詞を受けるものに再帰代名詞と同じ形式（もしくは語根を同じくすると思われる形式）が用いられる言語が多く存在すると考えられている。本稿では形式面での共通性が認められる限り、強調用法の形式も含めて、広く再帰代名詞と呼ぶことにする。区別する必要のある場合には、「広義の再帰代名詞」と明示し、主語を受けるもののみを指す場合に「狭義の再帰代名詞」と呼ぶことにする。

なおモンゴル語は梅谷 (2008) の方式により、朝鮮語は Yale 式により翻字した。本稿における例文等の訳およびグロスは断りのない限り筆者による。また先行研究の例文を引用した際には、その例文番号も本稿での通し番号に改変したことをことわっておく。

1. 類型論的観点からの先行研究の考察：狭義の再帰代名詞と強調形式

（狭義の）再帰代名詞（あるいは再帰前方照応）とは、「他動的な述語の主語でない名詞項が主語と同一指示的であることを示すのに典型的に用いられる表現一般」（König and Siemund (2005: 194)）とされている。

他方でKönig and Siemund (2005: 194) は、*The director **himself** opened the letter.*（連体的）「監督自身が手紙を開けました」もしくは*The director opened the letter **himself.***（副詞的）「監督は自分で手紙を開けました」における *himself* を、「強調形式 (intensifier)」と呼んでいる。これは「名詞句か動詞句に連体的にもしくは副詞的に結合されるもので、常に焦点化されていて韻律的にも顕著であり、それが関係する名詞句に代わるものを想起させる」としている。

König and Siemund (2005: 194) が 196 言語について調べた結果によれば、（狭義の）再帰代名詞と強調形式が同じ形式によって示される言語は 94 言語、異なる形式によって示される言語は 74 言語であるという。その系統と地理的分布についてみると、同一性を示す語族は、シナ・チベット語族、ドラヴィダ語族、アフロ・アジア語族、アルタイ諸言語、トランス・ニューギニア、インド・ヨーロッパ語族のインド語派である。差異性を示す言語群は、ユートアステク語族、ペヌーティ語族、そしてインド・ヨーロッパ語族のヨーロッパの語派

に主に占められている。同一性と差異性が共存する語族としては、オーストロネシア語族、オーストラリア諸言語とニジェール・コンゴ語族がある。地域分布に関しては、中央アジア、東アジアと東南アジア、南アジアの亜大陸、そして、ニューギニアは平均に比べ、同一性を強く示しているが、これに対してヨーロッパと北米中米南米の大部分では強調形式と再帰代名詞が異なっている。ヨーロッパの地域的集団は系統的起源が要因であると考えられるが、ニューギニアとアジアはこの点で言語地域を示すものとみている。

König and Siemund (2005: 195) では、さらに信頼できる情報のある62の言語に関して、強調形式と（狭義の）再帰代名詞の語源を検討し、次のようにこれを示している：「体」: 30の言語（例えばイグボ語、日本語、エウェンキー語[1]）／「頭」: 12の言語（例えばアブハズ語、パドゥコ語／「魂」: 2つの言語（例えば、現代標準アラビア語）／「骨」: 1つの言語（現代ヘブライ語）／「心臓」: 1つの言語（ヌビア語)／「皮膚」: 1つの言語（レンドゥ語南方言）。62言語のうちの33言語では（狭義の）再帰代名詞と強調形式が同じであり、さらにそのうちの24言語において、（狭義の）再帰代名詞と強調形式は体の部分の表現に関連があるという。

本稿の対象諸言語は、König and Siemund (2005: 195) のいう（狭義の）再帰代名詞と強調形式が同一であるアジアの言語地域に属する言語ということになる。

2. 形式面での対照

2.1. 語幹と格

各言語の諸先行研究等に基づき、対象諸言語における形式を表に整理すると以下のようになる。トルコ語については Göksel and Kerslake (2005)、モンゴル語については Kullmann and Tserenpil (1996)、ナーナイ語については Avrorin (1959)、朝鮮語については李他 (2004) および Sohn (1999) による。

表 1: 語幹部分の対照

	トルコ語	モンゴル語	ナーナイ語	朝鮮語	日本語
《再帰所有形[2]》「自分の」	kendi	öör-GEN-x-REF öör {=čin'/=tan'/=n'} öör-CM-REF	mənə/məən	{caki/ce/ tangsin}=GEN	zibun=GEN
所有以外の機能の再帰代名詞「自分-格」	kendi-CM		məən-CM-REF	{caki/ce/ tangsin}=CM	zibun=CM

[1] エウェンキー語について WALS が参照している Nedjalkov (1997) を見たが、再帰代名詞としてはやはりナーナイ語のものと同語源の məən- があがっているのみで、これについて「体」を語源とするという記述は見いだせなかった。Tsintsius i dr. (1975: 568) によれば məən- と同語源の語は女真語を除く全ツングース諸語に見出されるが、ここにも「体」の意味は見いだせない。そこでは məən- を朝鮮語の mom「体」と比較し、さらに朝鮮語 mom に「自分、（自分の身に関して）人」の意があるとしているが、少なくともこのような意味は mom には確認できない（油谷他（編）(1993) によった）。他方、ウデヘ語では mənəbəji「自分で」という語が用いられるが、これは mənə bəjəji「自分の 体で」に由来するものと考えられる（Kazama (2010: 208)）。ちなみに bəjə「人、体」も Tsintsius i dr. (1975: 122-123) によれば同語源の語が全ツングースにあり、そこではモンゴル祖語 beje(n)「体」, モンゴル語 bie「体」と比較している。

[2] Avrorin (1959) では「再帰物主代名詞」（vozvratno-pritjazhatel'noe mestoimenie）と呼んでいるが、本稿では通言語的な取り扱いの必要上、「再帰所有形」と呼んでおくことにする。

まず朝鮮語にのみ待遇に関する使い分けが観察される。すなわち、李他 (2004: 100) によれば、朝鮮語では 1 人称、2 人称の場合、再帰代名詞の代わりに人称代名詞の na, ne がそのまま使われるが、3 人称の場合は caki「自分」(漢語「自己」より)、ce「自分」、tangsin「ご自身」(漢語「当身」より、中国の古い俗語にもとづくという(亀井・河野・千野 (1996: 598)による)) のような別の形態が用いられる。これらは先行詞の待遇法上の等級によって区別され、ce は caki より先行詞を低める場合に、tangsin は高める場合に用いられるという。Sohn (1999) はさらに casin「自身」(漢語「自身」) および cachey「自体」(漢語「自体」) もあげている。このうち cachey は無生物に用いられる。

次に再帰所有形について検討する。モンゴル語と朝鮮語と日本語には、特別な再帰所有形と呼ぶべき形式はなく、再帰代名詞が単に属格をとることでその機能を果たす(このため表 1 のモンゴル語と朝鮮語と日本語の欄では所有以外の機能のものと境界線をはずした)。ただしモンゴル語では、後ろに人称小辞を伴わない限り、属格の後ろにさらに再帰人称接辞が必要で、(おそらくは) これを直接つけることができないため名詞化の機能を持つ -x が間に現れる (öör-ijn-x-öö (RP-GEN-NMLZ-REF))。Kullmann and Tserenpil (1996: 262) はこれを挿入子音としている(なお本稿のグロスでは名詞化とする)。さらに 1, 2 人称には öör-ijn {min' / čin' / tan'} (RP-GEN {1SG.POSS / 2SG.POSS / 2PL.POSS})) という形式も使われるが、1, 2 人称に対して öör-ijn-x-öö (RP-GEN-NMLZ-REF) を使うこともできるようだ。

(1) Či jaagaad **öör-ijn-x-öö** sandal deer suu-g-aa-güj jum be?
you why RP-GEN-NMLZ-REF chair on sit-E-PTCP-NEG SFP Q
「おまえはどうして自分の椅子の上に座らないのか？」Kullmann and Tserenpil (1996: 262)

トルコ語とナーナイ語では、格変化する諸形とは異なる形が現れる (以下では再帰所有形と呼ぶことにする)。トルコ語には属格があるにも関わらず属格なしで所有の機能を示す点で特殊である。ナーナイ語にはそもそも属格がなく、所有人称による主要部標示の構造で所有を示すので、単に無語尾の形とみることもできるが、他の格がつく məən- に対して mənə という異なった形が使われる点でやはり特殊である。これらの言語にみられる再帰所有形の不規則性は、これらの言語における再帰代名詞の連体的な形式の頻度の高さに一因があると考えられる。

次に強調用法の形式について検討する。強調用法のうち、主語を強調するものは、これを主格主語とみる立場がある。一般には、狭義の再帰代名詞であれば、主語を受けるというその定義上、再帰代名詞が主語であるというのはこれと矛盾していることになる[3]。

まずトルコ語に関して、Göksel and Kerslake (2005: 266) は 1, 2 人称の強調用法における kendi は主節の主語としてのみ用いられるとしている。

(2) Ev-de (ben) kendı-m otur-acağ-ım için bu renk-ler-i seç-ti-m.
house-LOC I RP-1SG.POSS live-PTCP.FUT-1SG for this color-PL-ACC choose-PST-1SG
「その家に私自身が住むのだから、これらの色を私は選んだ」
Göksel and Kerslake (2005: 265)

[3] 亀井他 (編) (1996: 597) では、「再帰代名詞には普通主格形はない」と述べている。

さらに、名詞節の主語として kendi が強調用法で使われる場合、再帰代名詞は格なし形式で現れ、動詞はこれと一致する。その先行詞は属格のみならず、格なしの形式でも現れる（Göksel and Kerslake (2005: 267)）。

(3) (Siz(-in)) kendi-niz ora-ya git-me-niz gerekiyor.
you-GEN RP-2PL.POSS there-DAT go-VN-2PL.POSS neccessary
「おまえたちはそこへ自分たちで行くべきだ」Göksel and Kerslake (2005: 267)

このように先行研究では「強調構造」として扱われてはいるが、トルコ語の kendi は先行詞なしでも格なし形式で現れ、さらに 3.3. 節で後述するような 3 人称の人称代名詞的用法があるので、主格主語とみるべき理由があると考える。

モンゴル語について Kullmann and Tserenpil (1996: 262) は、はっきり「主格の用法」としている。

(4) Bi üünijg öör-öö xij-sen.
I this.ACC RP-REF do-PTCP.PERF
「私はこれを自分がやった」Kullmann and Tserenpil (1996: 262)

(5) (Ta/Či) Öör-öö xaana ažill-a-dag ve?
you RP-REF where work-E-PTCP.HAB Q
「自分はどこで働いているのか？」Kullmann and Tserenpil (1996: 262)

3.3. 節で後述するように、(5) のような人称代名詞用法があるので、やはり主格主語とみることは支持できる。

ナーナイ語について Avrorin (1959: 252) は強調用法における mənə を定代名詞（opredelitel'nyj mestoimenie）とし、再帰代名詞とはしていない。これは強調構造に用いられるロシア語の定代名詞 sam が主語以外の要素を受けるため、同じく強調構造で用いられる形式を定代名詞としたものと考えられる。3.4. 節で後述するが、ナーナイ語にも主格と見なすことのできる再帰代名詞の形式は存在するものと考えられる。

日本語でも、例えば「私は自分がうまくやったとは思っていない」という文において、「自分」は主格助詞 =ga をとって現れるので、やはり再帰代名詞の主格はあると考えることができる。朝鮮語においても同様のことが言える。

(6) Minho=nun caki=ka cikcep ka-ss-e=yo.
Minho=TOP RP=NOM in.person go-PST-CVB=SFP
「ミンホは自分がじきじきに行った」Sohn (1999: 406)

本稿の対象諸言語で再帰代名詞の主格が成立するのは、3.2. 節でみる長距離束縛が可能なことと関わっていると考えられる。

再帰代名詞に主格があるか、というこの問題に関しては、機能面での考察において再び取り上げることにする。

「主格」形と属格／再帰所有代名詞（形）以外の格に関しては、トルコ語、モンゴル語、

朝鮮語、日本語では通常の名詞におけるのと同じ格形がどれもほぼ同じように現れる。これに対してナーナイ語の対格だけは、məəpi (SG) / məəpəəri (PL) と特殊な形が現れる。一般の名詞であれば、再帰の目的語は母音終わりの語であれば daŋsa-ji (SG) / daŋsa-ari (PL)「{自分の／自分らの} 本」、子音終わりの語であれば aapom-bi (SG) / aapom-bari (PL) 「{自分の／自分らの} 帽子」のようになる（なお再帰人称のついた名詞は対格を伴わずそれだけで対格相当の語として、つまり目的語として機能する）。したがって *məəm-bi (SG) / *məəm-bəri (PL) のような形が予想されるが、予想とは異なり鼻音要素が現れず、破裂音も無声で現れる。なお、この他には場所名詞の対格でこのような無声子音の不規則形が観察される。

2.2. 数と（再帰）人称

対象諸言語の数と人称要素を表に整理すると以下のようになる。

表 2: 数と再帰人称に関する対照

	トルコ語	モンゴル語	ナーナイ語	朝鮮語	日本語
単数	kendi	öör-CM-öö	məən-CM-ji	caki	zibun
複数	kendi-ler	öör-sd-CM-öö	məən-CM-əri	caki-tul	zibun-ra / zibun-tati

数について、トルコ語では名詞一般に用いられる通常の複数接辞 -lAr[4] がつくのに対し、モンゴル語では全く不規則な -sd がつく[5]。ナーナイ語では通常の名詞の複数接辞 -sAl は現れないが、再帰人称に単複の対立があるためこれによって単複が示された形になっている。再帰代名詞であるのに、さらに再帰人称接辞（モンゴル語ではもしくは人称の小辞）を義務的に取らなければならないという点でモンゴル語とナーナイ語は特異な特徴を共有している。日本語の複数の両形式には若干の待遇表現としての違いがあるのみで機能に違いはないものと思われる（筆者の内省による）。一般にモンゴル語と日本語で複数の標示は任意であるが、再帰代名詞の場合はより義務的であるようだ（この点に関しては今後の検討を要する）。

他方、再帰人称がつかない場合、モンゴル語では人称の小辞（1SG min’ / 1PL maan’ / 2SG čin’ / 2PL tan’ / 3 n’）、特に 2 人称の小辞が後続するとしている（Kullmann and Tserenpil (1996: 261)）。ただし Kullmann and Tserenpil (1996: 262-263)のあげる例文に 1 人称小辞の後続した例はない。コンサルタントからは 1 人称小辞の後続した例を得た（3.2.2. 節で後述）。現代のモンゴル語において、特に 2, 3 人称の小辞は人称を示すよりも情報構造の機能を担うものとなりつつあり（梅谷 2003）、再帰代名詞の場合にもこれらがどのように機能しているかは問題である。本稿では、特に 3 人称小辞の果たす機能に関して 3.2.2. 節で後述する。トルコ語では名詞一般に用いられる通常の人称接辞が用いられる（なおトルコ語には再帰人称接辞はない、またモンゴル語と同様 3 人称では数の対立がない）。ナーナイ語には 1/2/3/再帰の 4 つの人称の人称接辞があるが、再帰代名詞に現れるのはもっぱら再帰人称（-ji(SG) /

[4] 大文字は母音調和による異形態があることを示す。以下も同様である。
[5] モンゴル語の複数接辞には -s（主に -gč, -č で終わる職業などの人間名詞につく）および -d（人間名・物質名詞のごく一部につく）があるが、-sd という複数接辞はない（山越 2012: 219 による）。

-əri(PL)）のみである。このようにナーナイ語で再帰代名詞自体に 1/2/3 人称が表示できないことは、後述するように機能面でのトルコ語やモンゴル語の再帰代名詞との大きな違いにつながっているものと考えられる。

朝鮮語と日本語には人称接辞はない。ただ、朝鮮語で再帰代名詞とされているものは、上記のように 3 人称のもののみである。この点に関してはさらに 3.3. 節で取り上げる。

2.3. 形式に関する対照のまとめ

形態的な面での振る舞いは、おおざっぱに言って、日本語／朝鮮語＞トルコ語／モンゴル語＞ナーナイ語、の順で、規則的／膠着的なものから不規則的／屈折的なものへの異なりを示している。すなわち、朝鮮語および日本語の再帰代名詞は、一般の名詞とその振る舞いがほとんど変わらない。トルコ語では再帰所有の形式に関して属格が現れないという点で、モンゴル語では複数接辞が特異な点で、それぞれ明らかな不規則性を示している。ナーナイ語では再帰所有の語幹、複数、人称、対格などいくつもの形式で一般名詞とは異なった不規則な形を示す。

3. 機能と意味の面での対照

3.1. 研究方法

機能と意味の面の研究に際しては、①コンサルタントからの聞き出しと、②対照コーパスからの検索によってデータを収集した。まずコンサルタントは下記である。

表 3: コンサルタントの生年

言語	生年	出身地
トルコ語	1981	イスタンブール
モンゴル語	1987	ウランバートル
ナーナイ語	1935	ナイヒン
朝鮮語	1978	慶尚北道 yeyjen 郡 ywujemyen

①聞き出しの調査方法は、媒介言語の問題から、言語によって若干異なっている。トルコ語およびナーナイ語の話者は日本語に堪能ではないので、先にこちらで再帰代名詞を用いて作った文を作文し、その適格性を問うた。適格でないと判断された場合には、意図した意味内容を表現するもっとも自然な文を作っていただいた。さらにその再帰代名詞の文法的振る舞いについても若干の質問を行って確認した。モンゴル語および朝鮮語の話者は日本語が堪能であるため、日本語から当該言語（において自然な文）へとまず翻訳してもらい、さらに再帰代名詞の文法的振る舞いについて質問した。

②（主に 4.3.節での）対照コーパスからの調査では、特に *Le petit prince*（邦訳『星の王子様』）のトルコ語訳、モンゴル語訳、ナーナイ語訳[6]、朝鮮語訳、日本語版から、再帰代名詞に関する用例を収集した。

[6] ナーナイ語訳は、筆者が 2005 年に表 3 のコンサルタントの方（L. T. Kile 氏）にお願いしてロシア語から訳してナーナイ語キリル文字の正書法で書いていただいたものである（未公刊）。

機能面に関しては、次のような統語的および意味的ないくつかの観点から分析する：長距離束縛と非主語／斜格名詞句による束縛（3.2. 節）；人称代名詞化（3.3. 節）；複数行為者における相互の機能（3.4. 節）；有生物／無生物（3.5. 節）。なお先行研究に関してはそれぞれの節において言及するものとする。

3.2. 長距離束縛と非主語／斜格名詞句による束縛

3.2.1. （英語やロシア語に対する）日本語の長距離束縛と非主語／斜格名詞句による束縛

まず英語では、a. *Tim expected Ben to criticize himself.* / b. *Tim likes Ben's picture of himself.* の a. b.両文において、*himself* は必ず *Ben* を指し *Tim* を指すことはできない。これに対して日本語では、「*Tim* は *Ben* が自分を批判すると思った」および「*Tim* は *Ben* が所有する自分の写真を気に入った」という場合、「自分」は *Tim* を指すことができる（以上、平田他 (2016: 39) による）。この日本語の「自分」のような再帰代名詞は従属節の主語だけではなく、主節の主語も指すことができるが、この現象は「長距離束縛」と呼ばれており、日本語のみならず中国語など多くの言語に発見されているという（トルヒナ (2012: 71)）。他方、英語やロシア語などのヨーロッパ諸言語の再帰代名詞は比較的この束縛原理に従うとされている（トルヒナ (2012: 78)）。例えば、Avrorin (1959: 258) によれば、ロシア語での *Ja slyshu, chto **sebja** xvarit.* は「私は 聞いた、自分を（彼を／*私を） 彼が褒めるのを。」としか解釈できない。つまり長距離束縛ができない。

次に、庵 (2001: 110-112、下記の例文も) によれば、日本語では基本的に再帰代名詞は主語を先行詞とし、斜格名詞句を先行詞とすることができないが、使役や間接受け身など、埋め込み文になっている場合には被使役主や被動者が再帰代名詞を支配することもできる。

(7) 田中さんが吉田君に自分（田中さん／吉田君）の仕事をさせた。
(8) 太郎が花子に自分（太郎／花子）の部屋で死なれた（こと）（間接受身）
(9) 太郎が花子に自分（太郎／*花子）の部屋で殺された（こと）（直接受身）

なお、いわゆる斜格主語でも再帰代名詞による照応は起きると考えられる（角田 (2009: 231) など、下記の例は本稿筆者の作例による）。

(10) 太郎には自分の帽子がある。
(11) 太郎には自分の状況がよくわかっている。

ただし再帰代名詞の照応自体、主語の判定に用いられる基準の一つであるので、別の判定基準に基づいて主語を定義しない限り、トートロジーになる危険性がある。

3.2.2. トルコ語の長距離束縛と非主語／斜格名詞句による束縛

トルコ語において、格と人称によって屈折する kendi は長距離束縛が可能であるが、3人称の所有接辞を伴わない形式と伴う形式で若干の違いがあるという（以下この節の情報は 例文も含め Göksel and Kerslake (2005: 268-269) による）。まず 3 人称の所有接辞を伴わない形式は、同じ節内の動詞に表示された人称の人物を受けるものと解釈される傾向がある。

(12) Erol Ziya-'nın kendın-e bir araba al-dığ-ın-ı san-ıyor.
Erol Zıya-GEN RP-DAT one car buy-PTCP.PERF-3.POSS-ACC think-PROG
「エロルはズィヤが自分（ズィヤ）に車を買ったと考えている」

これに対し、kendisi は同じ節内の人物を受けてもよいし（再帰的）、上位の節の主語を受けてもよい（これについて Göksel and Kerslake (2005: 269) は「ただの 3 人称の代名詞として用いられている」としている）。

(13) Erol Ziya-'nın kendi-sin-e bir araba al-ma-sın-ı söyle-di.
Erol Zıya-GEN RP-3.POSS-DAT one car buy-VN-3.POSS-ACC say-PST
「エロルはズィヤが自分（エロル／ズィヤ）に車を買うと言った」

先行する文脈から明らかであれば、必ずしもその文自体からだけで 3 人称の主語が特定できなくとも問題ない（前の文の主語を受けることができる[7]）。この点からは長距離束縛であるばかりでなく、トルコ語の再帰代名詞の先行詞は語用論的に決定される面もあるといえるだろう。

(14) Nine-m çok yaş-lı. Artık kendin-e bak-am-ıyor.
grandmother-1SG.POSS very age-PROP already RP-DAT look.after-NEG.POT-PROG
「私の祖母はひどく老いている。もう自分の面倒が見られなくなっている」

所有の機能を示す修飾語 kendi に対する主要部名詞が 3 人称の人称を表示している場合、kendi はその節のどの 3 人称を受けることもできるが、ふつうは主語を受ける。次の文での「鍵」はセムラのものであるのがふつうだが、エリフという解釈もできる。つまり斜格名詞も先行詞となることができる。

(15) Semra Elif-'e kendi anahtar-lar-ı-nı ver-miş.
Semra Elif-DAT RP key-PL-3.POSS-ACC give-PTCP.PERF
「セムラはエリフに自分のカギを渡した」

斜格名詞項が先行詞になり得るとして、Göksel and Kerslake (2005: 268) はさらに次のような例も挙げている。なおこの文が使役文であることに注意したい。

(16) Sanki bana kendi-m-i anla-t-ıyor-lar-dı.
as.if I.DAT RP-1SG.POSS-ACC understand-CAUS-PROG-PL-COP.PST
「あたかも私に私自身のことをわからせようとしているようだった（彼らは）」

以上のようにトルコ語では長距離束縛も斜格名詞による束縛も可能であることがわかる。

---

[7] 先行研究の説明では、このように前の文の主語を受けるものとみているが、当該文の明示されていない主語を受けている、とみることもできよう（査読者の方の御指摘による、本稿の例文(38)も参照されたい）。そうであれば長距離束縛ではない、とすることも可能かもしれない。ただ明示されていない主語は前の文脈から判断されるわけであり、その点ではやはり語用論的に決定される、ということになろう。

3.2.3. モンゴル語の長距離束縛と非主語／斜格名詞句による束縛

コンサルタントによれば、次のような文で再帰代名詞は同じ節内の動作主を受けるという。したがって再帰所有接辞をとった再帰代名詞は、主節の主語でなく従属節[8]の主語を先行詞とすることがわかる。つまり長距離束縛では解釈されない。

(17) Bi tüünijg öör-ijg-öö magt-a-x-yg sons-son.
I (s)he.ACC RP-ACC-REF praise-E-PTCP.FUT-ACC hear-PTCP.PERF
「私は彼が自分（彼）を褒めるのを聞いた」

ただしこの場合であれば、1 人称の人称小辞を後続させれば、長距離束縛は可能であるという（コンサルタントの判断による）。

(18) Bi tüünijg öör-ijg min’ magt-a-x-yg sons-son.
I (s)he.ACC RP-ACC 1SG.POSS praise-E-PTCP.FUT-ACC hear-PTCP.PERF
「私は彼が自分（私）を褒めるのを聞いた」

モンゴル語における再帰所有接辞をとった再帰代名詞は主語を受け、斜格項を受けることはできないという（コンサルタントの判断による）。

(19) Bat Dulmaa-d öör-ijn-x-öö tülxüür-ijg[9] ög-sön.
Bat Dulmaa-DL RP-GEN-NMLZ-REF key-ACC give-PTCP.PERF
「バトはドルマーに（バト）自身のカギを渡した」

斜格項を受ける場合には次のようになるという。

(20) Bat Dulmaa-d öör-ijn-x n’ tülxüür-ijg ög-sön.
Bat Dulmaa-DL RP-GEN-NMLZ 3.POSS key-ACC give-PTCP.PERF
「バトはドルマーに（ドルマー）自身のカギを渡した」

(21) Bat nad öör-ijn min’ tülxüür-ijg ög-sön.
Bat I.DL RP-GEN 1SG.POSS key-ACC give-PTCP.PERF
「バトは私に（私）自身のカギを渡した」

(22) Bat čamd öör-ijn čin’ tülxüür-ijg ög-sön.
Bat you.DL RP-GEN 2SG.POSS key-ACC give-PTCP.PERF
「バトはおまえに（おまえ）自身のカギを渡した」

(23) Bi tüünijg öör-ijg n’ xen neg n’ magt-a-x-yg sons-son.
I (s)he.ACC RP-ACC 3.POSS who one 3.POSS praise-E-PTCP.FUT-ACC hear-PTCP.PERF
「私は彼自身のことを誰かが褒めるのを聞いた」

---

[8] 日本語同様、モンゴル語の従属節にも連用的なものも連体的なものも項的なものもあり、主節からの独立性の高いものから低いものまでいろいろある。独立性の異なる従属節の全てで再帰代名詞の照応が同じ振る舞いをするという保証はない。この点、今後の精査を必要とする。

[9] 通常モンゴル語では、主語の所有物には再帰所有接辞がつかなければならない。しかしこのように再帰代名詞が属格で所有している場合には、再帰所有接辞が現れないことがわかる（この指摘は査読者の方の御教示による）。こうした問題についてもさらに研究を進めていく必要があるものと考える。

したがってモンゴル語では、主語を受けるか否かは再帰代名詞自体でなく、付属する再帰所有接辞／所有人称小辞の別がその決定権を握っていることがわかる。まずこの点で他の一般的な名詞と同じである。すなわち、モンゴル語では 3 人称が主語の文において、主語以外の名詞項に再帰人称でなく 3 人称を用いれば、それは obviative の解釈、すなわち主語以外の 3 人称の人物を指す。つまり再帰代名詞もこの規則に従っているということになる。

Kullmann and Tserenpil (1996: 261-263) は再帰代名詞 öör- について、26 の例文をあげているが、öör- が主節の主語を受けていない例は下記の 6 例のみである。

(24) öör-ijn čin' öröö-g bi ceverl-e-sen.
RP-GEN 2SG.POSS room-ACC I clear-E-PTCP.PERF
「おまえの部屋は私が掃除した」

(25) öör-ijn tan' ner xen be?
RP-GEN 2PL.POSS name who Q
「あなた（がた）の名前は何ですか？」

(26) bid nar öör-t čin' beleg av-san.
we PL RP-DL 2SG.POSS present buy-PTCP.PERF
「私たちはあなたに贈り物を買った」[10]

(27) üünijg zövxön öör-t n' ög-öörej.
this.ACC only RP-DL 3.POSS give-HONOR.IMP
「これをただ彼（女）にだけ上げてください」

(28) üünijg ted nar-aar öör-sd-öör n' xij-lg-eerej.
this.ACC they PL-INS RP-PL-INS 3.POSS do-CAUS-HONOR.IMP
「これを彼ら自身でやらせてください」

(29) öör-ijn jum ör-güj.
RP-GEN thing debt-nothing
「自分自身のものは負債がない（諺）」[11]

これらの例は全て再帰人称接辞を取っておらず、2 人称もしくは 3 人称の小辞が後続しているか、どれも後続していないかのいずれかである。どの例も再帰代名詞は主語を受けていない（さらに 4 番目の文が使役文であり、再帰代名詞の先行詞は非使役主／元の能動態の動作主であることにも注意しておきたい、1 番目と 2 番目の文では再帰代名詞が主題となっている点にも注意したい、(28)の文では先行詞と同じ格を取り、同格もしくは一致のような表現になっていることも興味深い)。他方、残りの主語を受けている 20 例の全てで再帰

[10] なおこの 3 つの例に関して Kullmann and Tserenpil (1996: 262, 263) は、「čin' と tan' は ta と či ほどの敬意と直接性の違いを示さない」と述べている。なお上 2 例では再帰代名詞は文頭にあり、2 人称の小辞は主題標示としての機能も果たしているようであるが、3 つ目の例では文頭になく、むしろ焦点を示す名詞項であるように思われる。再帰代名詞に後続した場合の čin' と tan' の機能については今後さらに研究する必要がある。

[11] Kullmann and Tserenpil (1996: 263) は、この例は一般論であるため、再帰人称接辞を取らない、と述べている。

代名詞は再帰人称を取っており、しかも主語を受けていた。

『星の王子様』のテキストからは 28 例の再帰代名詞 öör- の例を得ることができた。そのうち主語を受けていないと考えられる例が 3 例あり、その全てに 3 人称小辞が現れていた。他方、主語を受けていると考えられる例の全てには再帰人称接辞が現れていた。再帰代名詞が 3 人称小辞を持ち、主語以外の名詞を受けていたその 3 例を以下に示す。

(30) xaad-uud-a-d öör-öös n’ busad xüümüüs albat met
king.PL-PL-E-DL RP-ABL 3.POSS other people subject like

xar-a-gd-dag-ijg bjacxan xuntajž med-e-x-güj až
see-E-PASS-PTCP.HAB-ACC little prince know-E-PTCP.FUT-NEG SFP

「王様たちにとってその自分（王様）以外の他の者たちは臣民のように見えるということを小さな王子は知らなかったのである」

(31) ner aldar-t dur-taj xümüüs-t busad büx xün öör-öör n’
name honor-DL interest-PROP people-DL other all people RP-INS 3.POSS

baxarx-aad baj-x šig san-a-gd-dag bilee.
exult-CVB be-PTCP.FUT like think-E-PASS-PTCP.HAB SFP

「うぬぼれやには、他の全ての人々はその自分（うぬぼれや）で大喜びすると思われるのだなあ」

(32) xümüüs-t, öör-sed-ijn-x n’ od-d-yg tani-uul-a-x
people-DL RP-PL-GEN-NMLZ 3.POSS star-PL-ACC recognize-CAUS-E-PTCP.FUT

gež od-o-d gerelte-ž baj-g-aa jum uu daa.
QUOT star-E-PL twinkle-CVB be-E-PTCP.PRS SFP Q SFP

「人々に、その自分たち（人々）の星を認識してもらおうと、星たちは輝いているのかなあ」

興味深いことに、3 例とも「受身」文（1 例は使役接辞による文だが、被使役主は与位格で現れているので意味は受動的と考えられる）であり、再帰代名詞の先行詞は（おそらくは主題として）文頭に与位格で現れている。しかも「受身」の接辞をはずして能動態に戻した場合に、その動詞語幹の動作主となっていることがわかる。(31)の文を除いて、再帰代名詞は先行詞の直後にある点も注目される。

以上のようにモンゴル語では、基本的に節内での束縛を受けるが、人称小辞を用いれば長距離束縛が可能であり、使役や受身の文で主に主題となっている文頭の名詞項などであれば、斜格であっても先行詞になり得ることがわかった。

3. 2. 4. ナーナイ語の長距離束縛と非主語／斜格名詞句による束縛

Avrorin (1959: 258) は、ナーナイ語がロシア語とは大きく違う点として、形動詞や副動詞により一文中に 2 つ以上の述語がある場合に、再帰代名詞は形動詞や副動詞による節[12]内の

[12] そもそも本稿の対象諸言語の副動詞や形動詞による「節」を、十全な「節」とみるかどうかについても

主語を受けず、主節の主語を受け得ることをあげている。つまり長距離束縛であり、次のような例を示している。なおこのことは筆者自身による調査でも確認できた。

(33) mii məəpi mapa mana-i-wa-ni=daa tolkiči-xam-bi.
I RP.SG.ACC bear consume-PTCP.IMPERF-ACC-3SG=CUM dream-PTCP.PERF-1SG
「私は自分を（私を）クマが食い尽くすのを夢に見た」 Avrorin (1959: 257)

(34) sii məəpi urə-wəŋ-kin rodina-do-ji
you RP.SG.ACC bring.up-CAUS-PTCP.PERF hometown-DAT-REF.SG
maŋga daai gəbuku-si.
very big honor-PROP
「あなたは自分を（あなたを）育てた故郷にたいへん大きな敬意を持っている」
Avrorin (1959: 257)

(35) buə ňoanči məən-du-əri buu-xə-či kəkukəən-səl-bə
we they RP-DAT-REF.PL.POSS give-PTCP.PERF-3PL flower-PL-ACC
shkola ǰuliə-lə-ni tari-xa-po.
school front-LOC-3SG.POSS plant-PTCP.PERF-1PL
「私たちは彼らが自分らに（私たちに）くれた花を学校の前に植えた」
Avrorin (1959: 257)

さらに次のような例では、主節主語と従属節主語のいずれにも解釈される、としている。

(36) mii ňoani məəpi makta-i-wa-ni doolǰi-i.
I (s)he RP.SG.ACC praise-PTCP.IMPERF-ACC-3SG hear-PTCP.IMPERF
「私は彼が自分を（彼を／私を）褒めるのを聞いた」Avrorin (1959: 257-258)

これに対し上述のように、ロシア語での *Ja slyshu, chto sebja xvarit.* は「私は彼が自分を（彼を）褒めるのを聞いた」としか解釈できないとしている。なお、再帰所有代名詞を用いた次のような文では、「私を（褒めた）」と解釈される可能性は完全に排除されるとしている。

(37) mii ňoani mənə məəpi makta-i-wa-ni doolǰi-i.
I (s)he RP RP.SG.ACC praise-PTCP.IMPERF-ACC-3SG hear-PTCP.IMPERF
「私は彼自身が自分を（彼を／*私を）褒めるのを聞いた。」Avrorin (1959: 258)

コンサルタントによれば、次のような文を超えた束縛の文も可能であるという。ただし、2 番目の文には先行詞となる主語を補うこともできるという。ナーナイ語はいわゆる pro-drop の言語であるので、表面上現れていなくとも 2 番目の文に再帰代名詞を束縛する主

問題がある。アルタイ型言語においては節と句が連続しており、両者の境界は不明確であると考えられる（風間 (2014) を参照）。逆に言えば、本稿の対象諸言語で再帰代名詞が基本的に主「節」の主語に支配されるものの、従属「節」の主語の支配を受けることもあるのは、このような連続性が原因であるとも考えられる。今後の継続的な研究を必要とするが、本稿ではひとまず慣例に従い、「従属**節**」と呼んで扱うことにする。

語は存在するとみるべきかもしれない。

(38) mii daanim-bi maŋga sagdaŋ-go-xa-ni.
I grandmother-1SG very get.old-REPET-PTCP.PERF-3SG

(ňoani) məəpi mənə dəŋsi-mi mutə-əsi osi-xa-ni.
she RP.ACC RP work-CVB can-NEG become-PTCP.PERF-3SG
「私の祖母はひどく老いてしまった。自分のことを自分ですることもできない」

他方、次の(39)のような文では、後続する節の主語を受けることはできないようだ。(39)で後続する節は命令文であるので、その主語は 2 人称の人物であると考えられるが、これを先行詞として先行する節で受けることはできないという。

(39) *əi məən mashina-ji anako-ni, əǰi xuədə-rə.
this RP.POSS car-REF.SG.POSS key-3SG.POSS NEG.IMP lose-INF
（意図した意味）「これは自分（おまえ）の車のカギだよ、失くすな」

上の文で意図しようとした意味は次のように人称代名詞でしか表現できないという。

(40) əi sii mashina-si anako-ni, əǰi xuədə-rə.
this you car-2SG.POSS key-3SG.POSS NEG.IMP lose-INF

次のような斜格名詞を先行詞とする文は不可とされた。

(41) *ňoanči mindu mənə xooni=daa bi-i-ji-wə
they I.DAT RP how=CUM be-PTCP.PERF-1SG-OBL

saa-waaŋ-kiča-i-či biǰərəə.
know-CAUS-INT-PTCP.IMPERF-3SG probably
（意図した意味）「彼らは私に自分（私）がどのようであるかを教えたいのだろう」

次のように主格を受ける形にすれば言えるという。

(42) ňoanči mii mənə xooni=daa bi-i-ji-wə
they I RP how=CUM be-PTCP.PERF-1SG-OBL

saa-waaŋ-kiča-i-či biǰərəə.
know-CAUS-INT-PTCP.IMPERF-3SG probably
「彼らは私が自分（私）がどのようであるかを教えたいのだろう」

他方、使役文における被使役主（派生前の動詞の動作主）の例では、次のような文が言えると判断された。ここで再帰代名詞 mənə は副詞的に（「自分で」） ta-「する」を修飾しているものと考えられる。

(43) *əi ǰobom-ba ňoambači mənə ta-waan-doo.
this work-ACC they.ACC RP do-CAUS-IMP
（意図した意味）「この仕事を彼らに自分たち（彼ら）でやらせろ」

ただし、次のように名詞を修飾していると考えられる文では斜格名詞項を受けることはできないと判断された。この解釈は、この場合に ǰobon「仕事」についている再帰所有接辞が文全体の主語のものであることを明示しているためであると考えられる。

(44) Sasha Marina-wa mənə ǰobom-bi ta-waaŋ-ki-ni.
Sasha Marina-ACC RP work-REF.SG.POSS do-CAUS-PTCP.PERF-3SG
「サーシャはマリーナに自分（サーシャ／*マリーナ）の仕事をさせた」

以上のようにナーナイ語では、長距離束縛は可能であるが、それは従属節中でも主語である場合のみである。斜格による束縛についてはさらに調査する必要があると考えるが、少なくとも一部の文では可能であることがわかった。

3.2.5. 朝鮮語の長距離束縛と非主語／斜格名詞句による束縛

Sohn (1999: 407) によれば、朝鮮語では長距離束縛が可能であるという。

(45) Tongmini=nunCihwani=eykey Milani=ka caki cip=ulo
Tongmin=TOP Cihwan=DAT Milan=NOM RP house=DIR
ka-ss-ta=ko malhay-ss-ta.
go-PST-IND=QUOT say-PST-IND
「トンミンはジファンにミランが自分（トンミン／ジファン／ミラン）の家へ行ったと言った」

Sohn (1999: 406) によれば、朝鮮語の再帰代名詞の最も自然な先行詞は主語であるが、文の主題、{直接／間接} 目的語、処格名詞や所有者も場合によっては先行詞になるという。この点で日本語よりもさらに束縛が緩く、照応が自由であることがわかる。

(46) Minho=nun caki=ka cikcep ka-ss-e=yo.
Minho=TOP RP=NOM in.person go-PST-CVB=SFP
「ミンホは自分がじきじきに行った」

(47) Yongho=nun Minca=lul ce=uy bang=eyse po-ass-ta.
Yongho=TOP Minca=ACC RP=GEN room=LOC see-PST-IND
「ヨンホはミンジャを自分（ヨンホ／ミンジャ）の部屋で見た」

(48) Mia=nun hal#apeci=kkey tangsin(=uy) chayk=ul tuly-ess-ta.
Mia=TOP grandfather=DAT.HONOR RP.HONOR=GEN book=ACC give-PST-IND
「ミアはおじいさんに御自分（おじいさん）の本をさしあげた」

(49) na=nun Tongmin=i sikyey=lul caki cip=eyse po-ass-e.
I=TOP Tongmin=GEN watch=ACC RP house=LOC see-PST-CVB
「私はトンミンの時計を自分（トンミン）の家で見た」

以上のように、朝鮮語においては長距離束縛も斜格名詞による束縛もかなり自由に行われることがわかる。

3.2.6. 長距離束縛と非主語／斜格名詞句による束縛に関するまとめ

まず長距離束縛について、日本語と朝鮮語は長距離束縛が可能であり、いずれの解釈も許容する。ナーナイ語でも節／文を越えて主語が再帰代名詞を支配することができる。トルコ語とモンゴル語において、まず、それぞれ人称接辞の無い形と再帰人称がついた形は、節内の主語を先行詞とする。ただしトルコ語では 3 人称接辞がついた kendisi となれば主節従属節のどちらの主語も受けられるようになる。モンゴル語では 1, 2 人称主語の文で主節主語の人称小辞を伴えば、主節の主語を受けられるようになる。

このように言語間で若干その成立条件に違いはあるが、いずれの言語でも長距離束縛が可能であり、この点で英語やロシア語とは大きく異なっていることがわかる。

次に斜格名詞句による束縛であるが、朝鮮語とトルコ語ではかなり自由にこれが可能である。日本語では使役や間接受け身など埋め込み文の場合、モンゴル語でも（人称小辞の助けを借りて）受身等で特に被動者が主題になっている場合などに、斜格名詞が先行詞になることが観察される。ナーナイ語でも使役文で被使役主（派生前の動詞の動作主）の斜格項が先行詞となる例が観察された。したがってここでも本稿の対象諸言語は共通してある程度以上、斜格名詞による束縛を許す言語[13]であることがわかる。

3.3. 人称代名詞化

本稿の対象諸言語の再帰代名詞は、ナーナイ語を除き、再帰代名詞が人称代名詞として用いられる、という現象が観察される。本節ではこの現象についてみていく。

Göksel and Kerslake (2005: 269-270) によれば、トルコ語の kendi には 3 人称の単純な代名詞としての用法があり、3 人称代名詞の o と言い換えられる場合がある。kendi を用いた方がよりフォーマルであるという。

(50) Ahmet hala uyu-yor. Kendi-si / O bu gün-ler-de çok yorgun.
Ahmet yet sleep-PROG RP-3.POSS / he this day-PL-LOC very tired
「アフメットはまだ寝ている。彼はこの頃すごく疲れている」

Kullmann and Tserenpil (1996: 262) によればモンゴル語では、同世代で知り合ってまだ間がなく、ta と či のいずれを使うべきかわからない場合に、再帰代名語が代わりに用いられるという。

(51) (Ta / Či) Öör-öö xaana ažill-a-dag ve?
you(PL) / you(SG) RP-REF where work-E-PTCP.HAB Q
「自分はどこで働いているのか？」

なお内蒙古では 1/2/3 のいずれの人称にも用いることができるとする話者もいる。例えば (51)の例文で Ta / Či (you(PL) / you(SG)) がなければ、文脈から明らかでない限り、2/3 人称のうちの誰を指しているのかはわからないという。

[13] 逆に見ればこの事実は、これら本稿の対象諸言語が、主語も他の斜格名詞項と同列に扱うタイプの言語であることを示しているとみることもできよう。

朝鮮語では、caki, ce, tangsin のいずれもが人称代名詞として用いられる。亀井・河野・千野（編）(1996: 598) では次のように述べている。

> 朝鮮語には再帰代名詞 čə がある。これは丁寧な言い方では 1 人称（単数）代名詞に用いられる。če-ga「わたくしが」。また現代朝鮮語では、2 人称代名詞に普通 tangsin を使うが、これは「当身」という漢語で、元来は敬語の再帰代名詞であった。

以下に個々の形式の人称代名詞としての意味についての辞書の記述を示しておく。

> caki「〈俗〉（恋人・夫婦の間や年上の女性が年下の女性に対して）あなた、君、お前」（油谷他（編）(1993: 1470)）
>
> ce「na の謙譲語：私、わたくし」（油谷他（編）(1993: 1470)）
>
> tangsin「①（中年以上の夫婦の間で）あなた、お前、君　②目上の人を敬って言う：ご自分、ご自身　③対等な相手やけんかの相手に対して用いる：あなた、あんた、君、お前　④《広告文や外国語の翻訳などで》あなた、皆様」（油谷他（編）(1993: 468)）

さらに興味深いことに、謙譲語でない 1 人称代名詞の na にも「自分」の意味があるとされている。

> na「2《再帰代名詞的に》自分」（油谷他（編）(1993: 333)）

(52) uli=nun hunhi na honca=ui him=ulo sengcang#ha-y o-n
we=TOP often I/RP alone=GEN power=INS growth#do-CVB come-ADN

kes kathi sayngkak#ha-ki swip-ciman, inkan=un kyelkho
thing as thought#do-NMLZ easy-but human=TOP never

honcase sa-l su eps-nun kes=i-ta.
alone live-ADN means not.exist-ADN thing=COP-IND
「我々は自分一人の力で成長してきたように思いがちだが、人間は決して一人で生きることはできない」油谷他（編）(1993: 333)

上述のように、朝鮮語で再帰代名詞と呼ばれるのは 3 人称のものだけで、1/2 人称では人称代名詞の na, ne がそのまま使われる。李他（編）(2004: 100) には次のような例があがっている。なお 3 人称の人称代名詞はなく、代わりにもっぱら指示代名詞を用いた表現（ku salam「その 人」など）が用いられるが、これには再帰代名詞的な用法はないようだ。

(53) ku ttay=nun na=nun nay ilum=to ssu-l cwul molla-ss-e.
that time=TOP I=TOP my name=CUM write-ADN way not.know-PST-CVB
「そのとき私は自分の名前すら書けなかった」

(54) ne=nun ney=ka i seysang=eyse kacang cal#na-ss-ta=go
you=TOP you/RP=NOM this world=LOC most well#come.out-PST-IND=QUOT

mit-ni?
beleave-Q

「お前は自分がこの世の中で一番偉いと思っているのか？」

日本語における「自分」という語の、日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編） (2001: 985-986) における記述は以下のようである（要約による）。

①その人自身。自己。自身。
②自称。わたくし。多く、男性が改まったときに使う。また、もと日本の軍隊で、自称に用いられた。
③対称。「御自分」「御自分様」の形で用いられた。
(1)③の用法は中世末武士詞の「御自分」や「貴様」に代用する「御自分様」に見られ、「自分」に「御」がつくかどうかで二人称と一人称とに使い分けられていた。
(2)現在、大阪方言などに見られる二人称用法は、友人関係もしくは同世代と認識した場合、男女ともに、相手が同性なのか異性なのかを問わずに使用する。この場合の特徴としては、会話語であることと、使用者には一人称としての「自分」の使用がないという点である。
方言 対称。お前。千葉県、新潟県上越市、三重県伊賀、大阪府、大分県宇佐郡

命令文など、文末の形式から主語が予想できる場合、1/2 人称の人称代名詞と同等の機能を果たすことができる。下記の例文は日本語記述文法研究会（編） (2009: 40) による。
(55) 午後から雨が降りそうだったので、自分（私）の判断で雨具を用意してきました。
(56) 雨が降りそうな場合は、自分の（あなた[14]）の判断で雨具を用意してきてください。
(57) ［娘に車の鍵を手渡して，父が］それは自分（おまえ）の車の鍵なんだから、なくさないようにしなさい。

以上、本稿の対象諸言語における再帰代名詞の人称代名詞化をみた。人称代名詞化が顕著な言語から順におおよそ次のような階層になっていると考えられる（( )内は人称代名詞化の起きる人称）：

朝鮮語(1/2)＞日本語(1/2)＞モンゴル語(2)＞トルコ語(3)（＞ナーナイ語（なし））

モンゴル語とトルコ語では、人称小辞もしくは人称接辞を後続させれば、文を越えて照応することが可能であると思われる。したがってその場合、その再帰代名詞はきわめて人称代名詞に近いものとなり、人称代名詞での置き換えも可能であろう。

日本語においても、文脈によって次のような文が可能であると考える。
(58) （あいつは）雨が降りそうなことは知っているんだから、自分（あいつ）の判断で傘ぐらい持って来るんじゃないか？ （筆者内省による）

コンサルタントによれば、朝鮮語でも同様の文が可能であるという。

[14] 筆者の内省によれば、この(55)(56)の文で「自分」を「私」や「あなた」に変えると「雨具」は当人だけのものでなくともよいような気がする。さらに、例えば(56)の文は、複数の集団に対して発話している感じがする。これらのことを考慮すると、「自分」は【集団の他の成員に対する個々人それぞれ】のようなニュアンスを持っているように感じられる。軍隊での使用が広まったのも、こうしたニュアンスが基盤にあったと考えられないだろうか。

(59) (ku=nun) pi=ka o-lci=to molu-ntanun ke=n a-nikka
(s)he=TOP rain=NOM come-Q=CUM not.know-QUOT.ADN thing=TOP know-CVB

caki=ka phantan#ha-yse wusan cengto=nun kacy-e#o-ci an=h-ulkka?
RP=NOM judgement#do-CVB umbrella like.that=TOP bring-CVB#come-CVB NEG=do-Q
「(あいつは) 雨が降りそうなことは知っているんだから、自分 (あいつ) の判断で傘ぐらい持って来るんじゃないか？」

したがって次のように捉えた方が良いかもしれない：
朝鮮語(1/2/(3))＞日本語(1/2/(3))＞モンゴル語((1)/2/(3))＞トルコ語((1)/(2)/3)

3.4. 複数行為者における相互の機能

亀井・河野・千野 (編) (1996: 597) は次のように述べている。

> 再帰代名詞はまた相互代名詞として用いられる。これは「互いに」の意を示すもので、フランス語で、Ils se haïssent. と言うと、「彼らは互いに憎み合う」ということになる。どうして再帰代名詞が相互代名詞に転用されるかと言えば、再帰的用法では、行為が行為者自身に跳ね返るが、相互的用法では行為者から発した同じ行為が異なる行為者によって元の行為者に跳ね返ってくるからである。

トルコ語では bir「1」に由来する birbiri「おたがい、それぞれ、つぎつぎ」(竹内 (1989: 53)、下記の例も) が用いられ、kendi からなる形式は用いられない。

(60) İki çocuk birbiri-ni kucakla-dı.
two child each.other-ACC hug-PST
「二人のこどもはたがいに抱き合った」

(61) Birbirini ardınca on kişi gel-di.
each.other behind ten person come-PST
「つぎつぎと 10 人が入ってきた」

モンゴル語では bije「体、身体；自分、自ら；側」(小沢 (1983: 51)、以下の例も) に由来する bije bijee「互いに、それぞれ」が用いられ、öör- に由来する形式は用いられない。

(62) bije bijee rüü-g-ee čix-e-x
body body DIR-E-REF push.into-E-PTCP.FUT
「互いに押し込む」

(63) bije bijee-s-ee iči-x
body body-ABL-REF be.ashamed-PTCP.FUT
「互いに恥じる」

ちなみに bije は bijedee「自分に、自分から、自分のために」(小沢 (1983: 51)、以下の例も) の形で再帰代名詞的にも働くようだ。

(64) bijedee av-č jav-na.
RP take-CVB go-IND
「自分でもって行く」、
(65) bijedee najd-a-x
RP believe-E-PTCP.FUT
「自己を信ずる、過信する」

ナーナイ語では ǰia「仲間、友達」に方向格 -či と再帰複数の所有接辞 -ari のついた形からなる ǰia ǰiačiari という句が相互的な行為に用いられる。
(66) ǰia ǰia-či-ari niŋmaan niŋmaan-dii
fellow fellow-DIR-REF.PL.POSS tale tell-PTCP.IMPERF
「互いが 互いへ 物語を 語る」風間 (2007: 94)

ただし再帰代名詞 məən- による次のような表現は可能である（コンサルタントによる）。
(67) məən doo-la(-ari) xisaŋgo-xa-či
RP inside-LOC-REF.PL.POSS talk-PTCP.PERF-3PL
「自分らの中で話し合う」

朝鮮語では、sero「互いに」、日本語では tagai=ni によって基本的に相互的行為が表現される。

以上、本稿の対象諸言語の再帰代名詞は基本的に相互の用法では用いられない[15]ことがわかる。なお 5 節で問題にするが、本稿の対象諸言語と同系統の言語のなかには、再帰代名詞の重複により構成される相互の表現が散見される。

3.5. 有生／無生

Göksel and Kerslake (2005: 263) によれば、トルコ語の kendi の先行詞は無生物であってもよいという。
(68) Bu, ev-in kendi rengi.
this house-GEN RP color
「これが、その家の本来の色だよ」

コンサルタントによれば、モンゴル語の öör- も無生物を受けることが可能である。
(69) Ene bajšing-ijn jag öör-ijn-x n’ öngö ene baj-na.
this building-GEN just RP-GEN-NMLZ 3.POSS color this be-IND
「この建物のまさに本来の色はこれだよ」（コンサルタントによる）

[15] 査読者の方から、朝鮮語では chaki-tul-kkili「自分-たち-同士で」が相互を示しうるのではないか、とのコメントをいただいた。日本語でも「自分らの間でよく話し合っておけ」などのような表現も可能であろう（筆者内省による）。

コンサルタントによれば、ナーナイ語での再帰代名詞 məən- は無生物を受けることができないという。

(70) *əi=kuči əi ǰoo məən boiko-ni.
this=FM this house RP color-3SG.POSS
（意図した意味）「これこそこの家の本来の色だ」

(71) *təi plan=tanii təŋ məən doo-la-ni problema-ko-ni=goani.
that plan=TOP just RP inside-LOC-3SG.POSS problem-PROP-3SG.POSS=SFP
（意図した意味）「その計画はまさにそれ自体の中に問題を持っているのだ」

朝鮮語では cachey「自体」（漢語「自体」）、日本語でも「自体」によって無生物を受けることができる[16]が、やはり人間に用いるのとは別の再帰的要素である。ちなみにモンゴル語やナーナイ語で用いたトルコ語の先行研究の例文をコンサルタントに訊いてみたところ、cachey も用いられなかった。

(72) i kes=i ku cip {ponlay=uy / *casin=uy} sayk i-ta.
this thing=NOM that house original=GEN / RP=GEN color be-IND
「これがその家の本来の色だ」

以上有生／無生に関しては、トルコ語とモンゴル語では同じ再帰代名詞を用いることができるが、ナーナイ語では用いることができず、朝鮮語、日本語でも異なる形式を用いることがわかった。

4. 分析と考察

この節では、本稿の対象諸言語において、なぜ狭義の再帰代名詞と強調形式が同じ形であるのか、人称代名詞化するのはなぜかについて考察する。そこでは再帰代名詞が話者や主体となっている人物の視点に束縛されている点についても検討する。さらに広義の再帰代名詞とは何であるのか、について検討を加える。

4.1. 狭義の再帰代名詞と強調形式が同一である理由、および人称代名詞化の理由

König and Siemund (2005: 195) は、再帰代名詞と強調形式に同じ表現を使う言語では、この表現が派生自動詞標識（marker of derived intransitivity）と中間標識（middle marker）としては使われない、という相関がみられることを指摘している。派生自動詞標識および中間標識の例には、次のようなドイツ語とスペイン語の例があげられている：［ドイツ語］*Karl setzte sich.*（Charles sat RP）「カールは座った」、*Die Tür öffnete sich.*（the door opened RP）、「ドアが開いた」、*Dieses Hemd wäscht sich gut.*（this shirt washes RP well）「このシャツはよく洗える」；［スペイン語］*Se venden coches usados.*（RP selling cars used）「中古車のセール」、*Aquí se habla español.*（here RP speak Spanish）「ここではスペイン語が話されている」。

[16] ただし「自身」「自分」と比べると、「自体」の自立性は低い。したがって自立語的な用法では無生物でも「自分」ないし「自身」の許容度があがる。次のような例が考えられる：「骨は**自分で**自分の量をコントロールしている」;「この美術館はそれ**自身が**アートだ」。以上査読者の方からの御教示による。

金田一 (1988: 162) も、フランス語やスペイン語には再帰動詞が多いため、「自分を満足させる」、「自分を驚かせる」など再帰の要素を含んだ表現が多いが、日本語には再帰動詞がないので、このような代名詞を使うことは少ない、としている。

本稿の対象諸言語と、上記のようなヨーロッパの印欧諸語の多く（以下 SAE（Standard Average European）と呼ぶ）との違いを整理すれば次のようになろう。すなわち、SAE には SVO 語順・他動詞優勢[17]・自動化型（風間 (2016)）という特性があり、このため再帰代名詞は強く文法化しており、動詞の態と深く関わっている（言い換えれば、狭義の再帰代名詞としてのみ機能する）。態は動詞複合体のもっとも語幹寄りに現れる文法カテゴリーであり、このために SAE の再帰代名詞は節を越えることが不可能で、短距離の束縛を受け、斜格名詞に支配されることもできない。歴史的にもロシア語における sja 動詞にみられるように、動詞に取り込まれていく過程をたどる。これに対し、本稿の対象諸言語においては、SOV 語順で他動詞は優勢でなく、再帰代名詞の文法化は進行しない。いわゆる Pro-drop で主語の現れない文も多く、所有などでは与格主語構文も用いられる。このため再帰代名詞は「視点」や主題によって束縛され、斜格名詞によって束縛されたり、節や文を越えて束縛され得る。これによってその機能はただの人称代名詞に近づき、再度、より語彙的な要素となり、人称代名詞化するということも起こるのだと考える。このように多くの特徴がそれぞれの言語群で内的関連のある特徴の束をなしているが、再帰代名詞を中心に考えてごく簡単にまとめるならば、長距離束縛の可不可が両言語群（おおまかに言えば SAE とアルタイ型の諸言語）における再帰代名詞の性格をもっとも大きく左右していると言うことができるだろう。

ここではさらに再帰代名詞が「視点」によって束縛される、という点について若干の調査結果を示しておく。

久野 (1978: 205-206) では次のような文の適格性の違いから、「再帰代名詞の視点制約」を提案している。

(73) ジョンは十年前にメアリーが自分を訪ねて来た家で今は幸福に暮らしています。

(74) *ジョンは十年前にメアリーが自分を訪ねて行った家で今は幸福に暮らしています。

《主観表現の経験主体制約》：内部感情を表す主観表現は、話し手が、その感情の経験主寄りの視点を取った時にのみ用いられ得る。

コンサルタントによれば、モンゴル語（(75), (76)）ナーナイ語（(77), (78)）、朝鮮語（(79), (80)）、にもやはりこうした制約がある。

(75) Bat Dulmaa-g öör-tej n’ uulz-a-x-aar ir-e-x üje-d
Bat Dulmaa-ACC RP-COM 3.POSS meet-E-PTCP.FUT-INS come-E-PTCP.FUT time-DL
bajnga sandar-dag.
always panic-PTCP.HAB
「バトはドルマーが自分（バト）に会いに来るときはいつも落ち着かない様子だ」

[17] 筆者は SVO 語順と他動詞優勢の特徴の間には内的関連性があり、一部の言語に関しては歴史的な説明もできると考えている。このことについては今後また稿を改めて述べる予定である。

(76) *Bat Dulmaa-g öör-lüü n’ uulz-a-x-aar jav-a-x üje-d
Bat Dulmaa-ACC RP-DIR 3.POSS meet-E-PTCP.FUT-INS go-E-PTCP.FUT time-DL

bajnga sandar-dag.
always panic-PTCP.HAB
（意図した意味）
「バトはドルマーが自分（バト）に会いに行くときはいつも落ち着かない様子だ」

(77) Sasha Marina məən-či-ji ǰiima-i-do-a-ni
Sasha Marina RP-DIR-REF.SG.POSS visit-PTCP.IMPERF-DAT-OBL-3SG.POSS

tul tul xaal xaal osi-i-ni.
always flutter-PTCP.IMPERF-3SG
「サーシャはマリーナが自分（サーシャ）のところへお客に来る時にはいつもそわそわしている」

(78) *Sasha Marina məən-či-ji ənə-i-du-ə-ni
Sasha Marina RP-DIR-REF.SG.POSS go-PTCP.IMPERF-DAT-OBL-3SG.POSS

tul tul xaal xaal osi-i-ni.
always flutter-PTCP.IMPERF-3SG
（意図した意味）
「サーシャはマリーナが自分（サーシャ）のところへお客に行く時にはいつもそわそわしている」

(79) Chelswu=nun Yenghuy=ka casin=ul manna-le o-l ttay=ey=nun
Chelswu=TOP Yenghuy=NOM RP=ACC meet-CVB come-ADN time=DAT=TOP

hangsang tultt-e iss-nun mosup i-ess-ta.
always flutter-CVB be-ADN appearance be-PST-IND
「チョルスはヨンヒが自分（チョルス）に会いに来るときはいつも落ち着かない様子だ」

(80) *Chelswu=nun Yenghuy=ka casin=ul manna-le ka-l ttay=ey=nun
Chelswu=TOP Yenghuy=NOM RP=ACC meet-CVB go-ADN time=DAT=TOP

hangsang tultt-e iss-nun mosup i-ess-ta.
always flutter-CVB be-ADN appearance be-PST-IND
（意図した意味）
「チョルスはヨンヒが自分（チョルス）に会いに行くときはいつも落ち着かない様子だ」

他方、トルコ語では下記の両文（(81), (82)）とも、言えると判断された。

(81) Ali on yıl önce Deniz-in kendi-sin-i ziyaret et-me-ye
Ali ten years before Deniz-GEN RP-3.POSS-ACC visit do-VN-DAT

gel-diğ-i ev-de şimdi mutlu otur-uyor.
come-PTCP.PERF-3.POSS house-LOC now happily stay-PROG
「アリは 10 年前にデニズが自分（アリ）を訪ねて来た家で今は幸せに暮らしている」

(82) Ali on yıl önce Deniz-in kendi-sin-i ziyaret et-me-ye
Ali ten years before Deniz-GEN RP-3.POSS-ACC visit do-VN-DAT

git-tiğ-i ev-de şimdi mutlu otur-uyor.
go-PTCP.PERF-3.POSS house-LOC now happily stay-PROG
「アリは 10 年前にデニズが自分(アリ)を訪ねて行った家で今は幸せに暮らしている」

以上、本節では本稿の対象諸言語で狭義の再帰代名詞と強調形式が同一の形をとることが、根本的には長距離束縛が可能であることに起因することを示した。さらに長距離束縛される再帰代名詞は、特に内部感情を表す主観表現において、その感情の経験主寄りの視点によって束縛されていることをみた。久野 (1978: 232-253) では、日本語のみならずラテン語、ギリシャ語、英語、アイスランド語、ロシア語等の再帰代名詞も視点表現的な特徴を持っていることを指摘し、これをかなり汎言語的な特徴であるとしている。したがって本稿の対象諸言語の再帰代名詞が示す視点表現的な特徴は、①汎言語的な特徴であるのか、②アルタイ型などの類型と内的関連のある特徴であるのか、③東アジアなどの地域における地域的特徴であるのか、についてさらに検討していく必要があるものと考える。

4.2. 広義の「再帰代名詞」に関する再検討

König and Siemund (2005: 194-195) では、あくまでも狭義の再帰代名詞と強調形式を別物とみなし、言語によって両者が同形式であるか否か、という観点から分析を行っていた。これに対し、両者が連続したものである、もしくは両者を包括した「広義の」再帰代名詞を明確に定義することはできないだろうか？

以下は、トルヒナ (2012: 73-74) を引用する。

> Kuno（1972）は早い段階で日本語の「自分」は先行詞として主節の名詞句を持つ場合は「意識の制約」という意味的制限が働くことを指摘している。
>
> (9) a. 太郎 i は自分 i を悪の道に陥れた女に仕返しをした。 b. *太郎 i は自分 i を殺した男と、以前僕の家であったことがある。
>
> Kuno（1972）等はこのような用例を証拠に、いわゆる長距離束縛は「意識」または「視点」と深くかかわっており、「自分」が長距離束縛を受けられるのは、主節の主語に「意識」がある場合のみであり（(9b)では「自分」の先行詞は死者であるため視点を持たず、文が成立しない）、文の構造はその文が誰の視点から述べられているかということと密接に関係していると主張している。このような視点を持った「自分」はアフリカ諸語に見られる「話者指示的代名詞」（logophoric pronoun）と似たような性質を持つと考えられている。この代名詞は間接話法における原話者を指示する代名詞で人称代名詞と

形態上区別されるものである。久野（1978：213）は日本語の「自分」には、発話、思考、意識等を表す動詞に従属する節の中で用いられる場合、その発話、思考、意識等の発話者、経験者を指す、という話者指示的用法があると仮定している。Hirose（2000）、廣瀬（2005）等は「自分」の話者指示的用法に関して考察を深め、日本語では英語とは異なり、「公的自己」と「私的自己」が形態的に 区別され、話者指示的に用いられる「自分」は「私的自己」を表す表現であるとしている。

廣瀬 (1997) は、英語の I は「聞き手と対峙する「伝達の主体」としての話し手」（廣瀬 (1997) は「公的自己」と呼んでいる）を表示し、日本語の「自分」は「聞き手を想定しない「思考の主体」としての話し手」（廣瀬 (1997: 1-32) は「私的自己」と呼んでいる）を示す、としている。たしかに、「自分は自分、人は人」のような語句の意味を内省してみると、「自分」が「思考の主体」であり、他の人々は 2 人称であろうと 3 人称であろうと「自分」と対立する他の存在のように感じられる。他方、英語にはこうした「私的自己」を示す形式がないので、次のように思考内容の中の主体を示す場合には、日本語のように再帰代名詞を使うことはできず、思考する主体と照応する代名詞を繰り返すしかない、としている。

(83) 太郎は自分が天才だと思っている。　　廣瀬 (1997: 32)

(84) Taro thinks he is a genius.　　廣瀬 (1997: 32)

そこで同様な文に関して本稿の対象諸言語でどのように表現されるかを調査してみると、やはり日本語同様に再帰代名詞で表現できることがわかる（以下、(85) はトルコ語、(86) はモンゴル語、(87) はナーナイ語、(88)(89) は朝鮮語の文例である）。

(85) Ben {kendi-m / *ben}　yaşlan-dığ-ım-ı　　düşünü-yör-üm.
I　RP-1SG.POSS / I　grow.old-PTCP.PERF-1SG.POSS-ACC　think.of-PROG-1SG
「私は自分が年寄りになったと思っている」

(86) Bi {öör-ijg-öö / *bi}　nas-taj　bol-son　gež　bod-son[18].
I　RP-ACC-REF / I　age-PROP　become-PTCP.PERF　QUOT　think-PTCP.PERF
「私は自分を年寄りになったと思った」

(87) mii {mənə / məəpi / *mii}　sagdaŋ-go-xam-bi=m　　murči-xəm-bi.
I　RP / RP.ACC / I　get.old-REPET-PTCP.PERF=QUOT　think-PTCP.PERF-1SG
「私は自分が年寄りになったと思った」

(88) Chelswu=nun {casin=i / caki=ka}　chencay=lako　sayngkak#ha-n-ta.
Chelswu=TOP {RP=NOM / RP=NOM}　genius=QUOT　think#do-PRS-IND
「チョルスは自分は天才だと思っている」

(89) Chelswu=nun　ku=ka　chencay=lako　sayngkak#ha-n-ta.
Chelswu=TOP　he=NOM　genius=QUOT　think#do-PRS-IND
「チョルスは彼が（チョルスとは別の人物）が天才だと思っている」

このように本稿の対象諸言語では、思考内容の中の主体に再帰代名詞が用いられ、SAE

[18] コンサルタントによれば、(86) は Bi {öörööö / öörööö öörijgöö} nastaj bolson gež bodson.「私は｛自分が／自分が自分のことを｝年寄りになったと思う」でもよいという。

のように照応する人称代名詞を繰り返すことはできないことがわかる。

中右 (1997: v) は、下記のような文について次のように主張している。

(90) 太郎は自分が楽天家だと思っている。

(91) 太郎は昨年、自分の生まれた町を再訪した。

(92) 太郎は自分が嫌になった。

(90)の「自分」は私的自己を表す本来の用法だが、(91)では視点的用法、そして(92)では再帰的用法として区別される。とはいえ、もとは 1 つである。私的自己を表す「自分」こそが基本で、それ以外の「自分」は客体的自己を表す。客体的自己が視点的用法と再帰的用法に分かれるのは、自己の異なる客体化のありようによるのだ、と著者はみる。

十分な証明ができているわけではないが、上記の 3 つの用法がいずれも確認できることから、本稿の対象諸言語における（広義の）再帰代名詞も、「私的自己」（聞き手を想定しない「思考の主体」としての話し手）としての意味を中心に一連の用法を示すものであると考える。

4. 3. 対象諸言語の再帰代名詞の本質的性格

廣瀬 (1997) は、英語の再帰代名詞の本質が再帰的用法にあるのに対して、日本語の再帰代名詞の本質は思考内容の中の主体の用法であるとしている。本節では、このことが日本語以外の本稿の対象諸言語にも当てはまるとみて、コーパスからの調査を行う。具体的には、対象諸言語で再帰代名詞が対格形で現れることは少なく、動詞は思考や感情の動詞に偏りを見せることを示す。以下にまず廣瀬 (1997: 74-86) を要約する。

［視点的用法］

himself は him と置き換えても文法的である(下付きの i は同一指示を表す)。

(83) 太郎 $_i$ は{自分/彼 $_i$}の後ろに本を置いた。

(84) Taro$_i$ put the book behind {himself/him$_i$}.

［再帰的用法］

次のような文における「自分」と himself は「彼」や him に置き換えると、主語と同じ人を指す解釈はできない。

(85) 太郎 $_i$ は{自分/*彼 $_i$}を責めた。

(86) Taro$_i$ blamed {himself/*him$_i$}.

英語の再帰代名詞は、本来この再帰的用法が本務である。これに対し、日本語の「自分」は、言語による思考の主体としての私的自己を表す用法が本務であり、そこから視点的用法と再帰的用法が派生してきた。

(87)の英文で himself は同一節内の主語である Bill を指すことはできるが、主節主語の John を指すことはできない。これは、英語の再帰代名詞の本来的な機能が動詞の表す出来事の再帰性を示すことにあるため長距離束縛が不可能なのだと考えられる。

(87) John$_i$ thinks that Bill$_j$ blamed himself(*i, j}.

一方日本語では長距離束縛が可能でどちらも指すことが可能で、特に文脈の情報がなければむしろジョンを指す。これは日本語の「自分」において私的自己を表す用法が本来的なものであり、再帰的用法は派生的なものにすぎないためである。

(88) ジョン$_i$は、ビル$_j$が自分(i, j)を責めたと、思っている。

すると「自分」の再帰的用法は英語の再帰代名詞の再帰的用法より多くの制約を受けるということが予測される。英語では、人が自分の身体に働きかけるとき、その身体が客体的側面であるという点を捉えて、それを一般に -self で表現することができる。sit という動詞には自動詞用法と他動詞用法があるが、他動詞用法では(89)のように再帰代名詞を目的語にとることができる。

(89) Taro sat himself down on the chair.

これに対し、日本語では、主体が宿る身体やその部分を指して再帰的に「自分」とは言えない。なぜなら、再帰的用法の「自分」は主体から切り離され、他者と同じ側におかれる自己を表すからである。たとえば、次の例で「腰」の代わりに「自分」を用いることができないのはこのためである。

(90) a. 太郎は、いすに腰をおろした
b. *太郎は、いすに自分をおろした

次のような例についても-self で表現できる。

(91) a. I stretched myself out on the bed.
b.*ぼくはベッドの上で自分を伸ばした。

(92) a. One young man had hanged himself from the branch of tree.
b.* 1 人の青年が木の枝から自分をつった。

(93) a. Don't trouble yourself about that man.
b. ?あんな男のことで自分を悩ませるな。

(94) a. He concentrated himself.
b. ?彼は自分を集中させた。

普通の日本語では、(91)は「体を伸ばした」、(92)は「首をつった」、(93)は「頭を悩ませるな」、(94)は「気持ちを集中させた」というように言う必要がある。ただし、身体的行為を表す(91), (92)よりは、心理的行為を表す(93), (94)の方が「自分」の容認度は高い。

このように日本語では一般に、人がその主体の宿る身体に働きかけるときは、働きかけられる身体部位を表す名詞を目的語として用いなければならない。これは、日本語には主体と一体となった自己を表す一般的なことばがないからであると言える。

通常、主体は自己と一体化して人を構成しているが、主体が自己から分離したときに自己の客体化が起こる。自己が客体化されると、主体はその客体化された自己に自由に働きかけることができる。その出発点とでも言えるのが、自分を客観的に見つめるという行為である。自分を客観的に見つめることで自分がわかれば、人はその主体的意志によって、自分を愛したり(love oneself)、自分を尊重し

たり(respect oneself)、自分をほめたり(praise oneself)もできるし、あるいは逆に、自分を嫌ったり(hate oneself)、自分を軽蔑したり(despise oneself)、自分を責めたり(blame oneself)もできる。また、人前で、自分を主張したり(assert oneself)、あるいは、自分を抑えたり(suppress oneself)もできるし、1 人になって、自分に語りかける(speak to oneself)こともできる。このように、人の主体的意識作用を記述する述語が表す出来事においては、主体と自己の分離が最も起こりやすい。

このことをもとに、再帰的用法の「自分」を特徴づけると次のようになると思われる：[再帰的用法の「自分」は、それを含む述部の主語である人の主体から切り離された自己を表す]。

したがって、このように英語をはじめとする SAE（Standard Average European）では、行為を統御する主体が自己から分離していようがいまいが、物理的に行為が主体自体に及ぶときには再帰代名詞を用いる。他方日本語では、主体と自己が分離している場合にしか再帰代名詞を用いることができず、分離していない場合には身体部位を表す名詞を目的語として用いなければならない。ただし主体と自己が分離していると考えられる主体的意識作用を示す述語であれば、再帰的用法で再帰代名詞が用いられる。

筆者は、さらに上記のことは両言語群における次のような全体と部分の取り扱いとも関連していると考えている。すなわち、他者であっても体の部分に働きかける場合、英語では全体を目的語とするのに対し、日本語では体の部分が目的語／対象となる。自動詞や形容詞による表現でも、英語がその主体全体を主語にするのに対し、日本語では体の部分が主語となる傾向がある。

(95) I hit him on the shoulder.
(96) 私は彼の肩を叩いた。
(97) I have headache.
(98) 私は頭が痛い。

アルタイ諸言語や朝鮮語が、もし日本語と似たような傾向を示すとすれば、再帰代名詞が対格で現れることは少なく、もし現れてもその述語は意識作用を示す述語等に限られていることになる。この点について、*Le petit prince*（邦訳『星の王子様』）のトルコ語訳、モンゴル語訳、ナーナイ語訳、朝鮮語訳から、再帰代名詞に関する用例を収集し、それらをその格ごとに分類したうえで、再帰代名詞の対格形をとる述語について調査した。

まずトルコ語の対照コーパスを kendi によって検索したところ、79 例を得た。対格の比率は 40.5%（小数点第 2 位四捨五入、以下他の言語も同様）であった。

表 4: トルコ語『星の王子様』における再帰代名詞のとる格

「主格」	属格	与格	対格	処格	具格	奪格	再帰所有	後置詞	計
15	1	19	32	0	0	3	8	1	79

動詞の種類は次のようであった（なお ( )は 2 例以上あった場合の用例数を示す、以下他の言語も同様）：

beğen-(7)「気に入る、大事にする」/yargıla-(5)「裁判する」/hisset-(4)「感じる」/göster-(2)

「見せる」/savun-(2)「守る」/kaptır-「こだわらせる」/san-「感じる」/süslü-「着飾る」/ bul-「見つける」/at-「投げる」/topla-「集める、取り戻す」/önemse-「大事に思う」/ölme-ye bırak-「死んでしまう」/geri-ye sıçramaktan kendimi alama-「後ろに飛び上がらざるを得ない」/tutama-「保持する」/yor-「疲れさせる」/ver-「捧げる」

「気に入る」、「感じる」、「大事に思う」など、主体的な意識作用を示す動詞が多く見られることがわかる。「裁判する」が多いのは、『星の王子様』の 10 節に、王様が星の王子様に「自分を裁判せよ」と命じるくだりがあり、そのくだりで多くあらわれるためである（以下、この点は他の言語に関しても同様である)。他方、「守る」や「投げる」のような物理的な動作の動詞もある程度出現している。

モンゴル語の対照コーパスからは 28 例を得た。対格の比率は 21.4%であった。動詞の種類は次のようである：šüü-「裁判する」(4) / doolga-「からかう」/ sana-「思う」。

表 5: モンゴル語『星の王子様』における再帰代名詞のとる格

「主格」	属格	与位格	対格	具格	奪格	共格	計
8	9	0	6	1	2	2	28

モンゴル語では再帰代名詞の出現頻度自体が低く、対格で現れるものはさらに少ない。しかも物理的な働きかけを示す動詞の例は現れないことがわかる。

ナーナイ語からは 75 例を得た。対格の比率は 29.3%であった。

表 6: ナーナイ語『星の王子様』における再帰代名詞のとる格

「主格」	所有	与格	対格	具格	方向格	処格	計
17	12	0	22	2	22	0	75

bodo-(6) 「みなす」/ makta-「褒める」 / kaanǰo-(2) 「守る」/ baitalto-(2) 「疑う、非難する」/ səuxə- 「飾る」/ bulisi- 「なでる、化粧する」/ icə-「見る」 / ičəwəən-「見せる」/ uləən ta- 「良く思う」/ bimusi- 「〜でありたい」/ dosiǰa- 「聞く」/ sudilə- 「裁判する」/ tačio- 「教える」/ saa- 「知る」/ mədəsi- 「訊く」

ナーナイ語では一定量の再帰代名詞が現れるが、対格の例は多くなく、やはり「みなす」、「ほめる」、「疑う」、「良く思う」など、主体的な意識作用の動詞が多くを占めている。

朝鮮語では caki が 10 例、casin が 29 例得られた。両者の合計での対格の比率は 20.5%である。唯一の対格の例の動詞は poho#ha-「保護する」であった。

表 7: 朝鮮語『星の王子様』における再帰代名詞 caki のとる格

主格=ka/=i	格なしの所有	対格=(l)ul	計
4	5	1	10

表 8: 朝鮮語『星の王子様』における再帰代名詞 casin のとる格

主格=ka/=i	属格=ui	対格=(l)ul	共格=kwa/=wa	比較格=boda	計
9	11	7	1	1	29

casin を支配していた動詞は下記である。「守る」以外はやはり主体的な意識作用を示す動詞である。

simphan#ha- (3)「審判する」/ swungpay#ha-「崇拝する」/ chingchan#ha-「褒める」/ cikhi-「守る」/ poho#ha-「守る」

朝鮮語でも再帰代名詞自体の出現頻度が低く、対格の例はさらに少なく、動詞の種類も限られていることがわかる。

日本語では 30 例が得られた。対格の比率は 6.7%であり、2 例の動詞は「裁判する」と「思う」であった。ちなみに、「自身」の例は 1 例のみあった（「おまえ**自身**の裁判をしなさい」）。

表 9: 日本語『星の王子様』における再帰代名詞「自分」のとる格

「主格」ガ	属格ノ	与格ニ	対格ヲ	具格デ	共格ト	比較格ヨリ	計
3	19	2	2	2	1	1	30

以上の結果に基づき、対格の出現数の順に対象諸言語を並べてみると次のようになる。なお / の後ろは再帰代名詞の用例数である。

ﾄﾙｺ（40.5%/79）＞ﾅｰﾅｲ（29.3%/75）＞ﾓﾝｺﾞﾙ（21.4%/28）＞朝鮮（20.5%/29）＞日本（6.7%/30）

少なくとも、モンゴル語と朝鮮語、日本語に関しては、再帰代名詞の出現数自体も対格での使用も少なく、動詞はもっぱら主体的な意識作用を示すものに偏っているといえるだろう。

5. 同系統の諸言語における再帰代名詞の形式の分布や機能について

ここでは本稿の対象諸言語と系統を同じくする諸言語における再帰代名詞の分布や機能、歴史について概観する。ただし朝鮮語と日本語に関しては、いずれも漢語の形式であるため、扱わないこととする。

まずチュルク諸語内部において再帰代名詞とされている形式をみる。

トルコ語では上記のように kendi が用いられているが、チュルク諸語ではシベリアの諸言語などを除き、広く öz もしくはこれに類似しこれと同語源の形式が用いられる。トルコ語と同じオグズ語群のアゼルバイジャン語およびトルクメン語でも öz および öð が用いられる（Schönig (1998a: 252), Schönig (1998b: 265)）。なおトルコ語にも öz という語はあり、名詞としては「自身、自己、核心、本質、真髄、中核、核、髄、心（しん）、身」などの意味で、形容詞としては「真の、まことの、実の、まじりけのない、純粋な」などの意味で用いられている（竹内 (1989: 300)）。つまり kendi のように文法化しておらず、より一般的な／語彙的な普通名詞もしくは形容詞として用いられ、kendi と類似した意味を示してい

ることがわかる。

チャガタイ語群の言語のうち、ウイグル語の Hahn (1998: 390-391) の記述では özle(r) を2人称尊敬形単数としているが、Kajdarov (1966: 374)の記述ではやはり öz を再帰代名詞としてあげている。キプチャク語群のカラチャイ語では kes という形式が用いられる（Berta (1998b: 301)）。Gülensoy (2007: 496) はこれをトルコ語の kendi と同語源の形式とみている。その他のチャガタイ語群ならびにキプチャク語群の諸言語ではもっぱら öz もしくはこれに類似しこれと同語源の形式を用いている（Berta (1998a: 289-290), Berta (1998b: 301), Kirchner (1998a: 323), Csató and Karakoç (1998: 336-337), Kirchner (1998b: 348), Boeschoten (1998: 362)）。語尾を取らずに名詞修飾に用いられる点と、人称及び格の接辞を取って名詞的に用いられる点で、トルコ語の kendi と基本的性格は変わらないようだ（例えば Kirchner (1998a: 323) を見よ）。特にウズベク語の記述（Boeschoten (1998: 362)）では、ウズベク語の再帰代名詞 öz が文を超えて長距離束縛されることと焦点化機能をもつことが明記されており、焦点化機能に関しては次のような例があげられている：U kabinetdå özi otirbdi.「（彼女は）その部屋に自分だけで座っていた」; Kårimå özi kirib kėldi.「カリマは自分（の意志）で来た」。西部裕固語では、uz の他に、ehsə も用いられ、これは eɣe「主人」に 3 人称所有接辞がついたものに遡るとされている（陳・雷（編著）(1985: 82-83)）。

他方、南シベリアの諸言語では古チュルク語の boð「体、姿」に遡る語を用いるという：アルタイ語 boy; ショル語、ハカス語 pos; トゥバ語・トファ語 bot[19]（Schönig (1998c: 410)）。トファ語では特に［boz-人称 bīle］のような構成をとるという。チュヴァシュ語では χam/χăv/χăy/χamăr/χăvăr/χăysem「私自身／あなた自身／彼自身・彼女自身・それ自体／私たち自身／あなたたち自身／彼ら自身・それら自体」のような形式である（Clark (1998: 440-441)）。サハ語は beye であるが（Stachowski and Menz (1998: 423)）、これはモンゴル語からの借用であろう。Gülensoy (2007: 496)は、サハ語の 3 人称の人称代名詞 kini をトルコ語の kendi と同源の形式とみているようだ。これが正しければ、サハ語では人称代名詞化が起きたものと考えられる。

古代チュルク語の再帰代名詞は kendi と同源の kentü であるとされているが（Erdal (1998: 144)）、同じ記述には Küseyür men **kentü öz**üm anïtmaɣalï.「望む、私は私自身に思い出させないようにと」のように両方の形式が用いられている例も見える（Erdal (1998: 153)）。同じく Erdal (1998: 154) に、et' **öz**「体（et' は「肉」）」のような例があることから、öz もかつてはより一般的な語彙的意味を持つ名詞だったことがうかがわれる。

相互の形式に関しては、ノガイ語に öz-özine「互いに」（Csató and Karakoç (1998: 337)）、サハ語にも相互の形式として、beye beye にさらに所有人称接辞と格の曲用接辞のついた形式がある（Stachowski and Menz (1998: 423)）と記述されている。

次にモンゴル諸語についてみる。ブリヤート語、ダグール語、オルドス語、オイラート語に関しては、ハルハ方言の öörö と同源の語が用いられる（それぞれ Skirbnik (2003: 111), Tsumagari (2003: 142), Georg (2003: 202), Birtalan (2003: 220)）。他方、モゴール語に関しては orin の他に、usa-nah という形式もあがっている（Weiers (2003: 256)）。ブリヤート語に関し

[19] なおトゥバ語の bot には「独身」の意もあるという（江畑 p.c.）。上記のウズベク語における「自分だけで」のような意味からさらに派生したことが考えられよう。

て、beye「体」も再帰代名詞の代わりに用いられること、öör öör や beye bey-ee といった重複形式が「互いに」の意で用いられること、下流ウダ方言では再帰代名詞の SG: ööhen, PL: ööhed が 3 人称代名詞としても用いられることが記されている（Skirbnik (2003: 111-112)）。ダグール語に関しては、主語と照応せずに、強調形式として機能することが記されている（Tsumagari (2003: 142)）。オイラート語においても、人称にかかわらず主語の代わりとして用いられることが指摘されている（Birtalan (2003: 220)）。

佐藤 (2017: 85) によれば、河西回廊のモンゴル諸語の 1 つである康家語の 3 人称代名詞は、モンゴル文語の再帰代名詞 öber「自分の」（ハルハ方言における öörö に対応する）の属格形 öberün に対応するという。同じく河西回廊の東郷語および保安語同仁方言での対応形式 oruŋ, oroŋ は引用文中の 1 人称を示すという。これに対し、現在上記の 3 言語は再帰代名詞に漢語の《各家》に基づく形式を用いているという（佐藤 (2017: 84)）。これに対し、同じく河西回廊の東部裕固語では、モンゴル文語の eǰen「主」と同源の edʒen が「引用文中の一人称」および「再帰代名詞」として機能し、やはり河西回廊の土族語互助方言では同じく同源の ndʑeen が「主」のほかに、下位方言によって状況は異なるが、「本人」や、「引用文中の 1 人称」、「再帰代名詞」を示す、としている（佐藤 (2017: 85)）。佐藤 (2017: 85) は「主」に対応する語の意味変化を接触するチベット語アムド方言からの影響とみている。東部裕固語で「主」の意味を持つ語を語源とする語が「再帰代名詞」として用いられることは、これと言語接触の関係にある上記のチュルク系の西部裕固語で同様の状況があることを説明する。このようにモンゴル諸語では「思考の主体」としての機能に関連する現象（引用文中の 1 人称を示す用法）や代名詞化が、諸方言に現れているのを観察することができる。

いわゆる IV 群（満洲語、シベ語、女真語）を除くツングース諸語（I 群：エウェン語、エウェンキー語、ソロン語、ネギダル語、II 群：オロチ語、ウデヘ語、ヘジェ語、III 群：ナーナイ語、ウルチャ語、ウイルタ語）では、もっぱら上記のナーナイ語の mənə~məən と同語源で類似した音形の形式が用いられている（Tsintsius i dr. (1975: 568)、ウデヘ語に関しては本稿の註 1 を参照）。これに対し満洲語では人称代名詞に後続する beye「体」によって再帰代名詞が表現される（河内 (1996: 74)、なおこれもモンゴル語からの影響によって生じたものと考えられる）。シベ語の bəi は再帰代名詞として使われるとともに、2 人称敬称の代名詞としても用いられる（李・仲（編著）(1986: 66-68)）。ツングース諸語において、このように再帰代名詞における方言差が小さく、またその語源も語彙的な普通名詞に簡単に遡ることはできないということは、ツングース諸語の再帰代名詞が機能的にかなり文法化していることと無関係ではないと考えられる。

以上本節では、本稿の対象諸言語と同系統の言語群における再帰代名詞の分布や機能、歴史について概観した。

6. まとめと結論

本稿で観察した諸特徴に基づき、本稿の対象諸言語における再帰代名詞の文法化の度合いを対照し、表によってこれを整理すれば次のようになる（なおここでは SAE の一つの代表としてロシア語の状況を示すことにする）。

表 10: 再帰代名詞の形式および機能の対照（なお、条件付きで可能であるものや、若干の例外、別の形式などが認められるものには * を付した）

	ロシア語	ナーナイ語	モンゴル語	トルコ語	日本語	朝鮮語
形式の規則性	○	×	○*	○*	○	○
人称の標示	×	×	○	○	×	×
長距離束縛	×	○	○*	○*	○	○
斜格による束縛	×	×*	○*	○*	○*	○
人称代名詞化	×	×	○	○	○	◎
無生物への使用	×	×	○	○	×*	×*
相互の機能	○	×	×	×	×	×
ヴォイス的機能	○	×	×	×	×	×

本稿の対象諸言語における再帰代名詞は、SAE などに比べてより広い機能を示し（ナーナイ語を除く）、ヴォイス的機能などを持たない代わりに人称代名詞化などの特徴を示す。4.1.節で述べたように、筆者はこれらの言語において長距離束縛が可能であることがその原因であると考える。さらに、なぜ長距離束縛が可能なのかについては、主題や視点、思考の主体によって制御されている可能性を考え、これについて検証・考察した。ただしこの点についてはさらに検討を重ねていく必要があると考えている。

6. 今後の課題

査読者からもアドバイスをいただいたが、日本語の「自分」以外の再帰的な形式、すなわち、「自身、自体、自己、みずから、おのれ、（わが）身、そのもの…」などの諸形式についても分析・検討する必要がある。モンゴル語においても bije(dee) など、他の再帰的な形式を研究する必要がある。他の対象諸言語にもやはりさらに別の再帰的な形式があるかもしれない。トルコ語には再帰態の動詞語幹拡張派生接辞 -(I)n もあり、再帰代名詞とそれらの関係も問題となる（ただし、Göksel and Kerslake (2005: 153) によれば、基本的に両者は相補的な関係にあるという）。

各言語 1 名のコンサルタントからの聞き出しに拠っている点も問題であるが、何より（翻訳でない）より自然なテキスト／コーパスによるさらなる帰納的研究が必要であると考えている。これらの点を今後の課題としたい。

［謝辞］

本稿の内容に関して、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究プロジェクト「「アルタイ型言語」に関する類型的研究」第 8 回研究会にて発表を行った際に、山越康裕氏、渡辺己氏、江畑冬生氏より有益な情報を賜った。ここに記して感謝申し上げる。貴重なコメントを下さった査読の先生方にもお礼申し述べたい。

何より時間を割いて例文の適格性を判断するとともに貴重なコメントを下さったコンサルタントの方々に深くお礼申し上げたい。

略号一覧

ABL: ablative 奪格
ACC: accusative 対格
ADN: adnominal form 連体形
CAUS: causative 使役
CM: case marker 格標識
COM: comitative 共同格
COP: copula コピュラ
CUM: cumulative 累加
CVB: converb 副動詞
DAT: dative 与格
DIR: directive 方向格
DL: dative-locative 与位格
E: epenthetic vowel/consonant 挿入 子音／母音
FM: forcus marker 焦点標識
FUT: future 未来
GEN: genitive 属格
HAB: habitual 習慣
HONOR: honorific 尊敬
IMP: imperative 命令
IMPERF: imperfect 未完了
IND: indicative 直説法
INF: infinitive 不定詞
INS: instrumental 具格
INT: intentional 意志
LOC: locative 処格
NEG: negative 否定
NMLZ: nominalizer 名詞化
NOM: nominative 主格
OBL: oblique 斜格標示
PASS: passive 受身
PERF: perfect 完了
PL: plural 複数
POSS: possessive 所有
PROG: progressive 進行
PROP: proprietive 恒常的所有
PRS: present 現在
PST: past 過去
PTCP: participle 形動詞
Q: question 疑問
QUOT: quotational 引用
REF: reflexive 再帰
REPET: repetitive-reversive aspect 反復・反動体
RP: reflexive pronoun 再帰代名詞
SFP: sentence final particle 文末詞
SG: singular 単数
TOP: topic 主題
VN: verbal noun 動名詞
- 接辞境界
= 付属語境界
複合語境界

参考文献

Avrorin, V. A. (1959) *Grammatika nanajskogo jazyka, t. I*. AN SSSR, Moskva/Leningrad.
Berta, Á. (1998a) Tatar and Bashkir. In L. Johanson and Éva Á. Csató (ed.) (1998). 283-300.
Berta, Á. (1998b) West Kipchak languages. In L. Johanson and Éva Á. Csató (ed.) (1998). 301-317.
Birtalan, Á. (2003) Oirat. In J. Janhunen (ed.) (2003). 210-228.
Boeschoten, H. (1998) Uzbek. In L. Johanson and Éva Á. Csató (ed.) (1998). 357-378.
陳宗振・雷選春（編著）(1986)『西部裕固語簡志』北京：民族出版社
Clark, L. (1998) Chuvash. In L. Johanson and Éva Á. Csató (ed.) (1998). 434-452.
Csató, Éva Á. and Birsel Karakoç (1998) Noghay. In L. Johanson and Éva Á. Csató (ed.) (1998). 333-343.
Erdal, M. (1998) Old Turkic. In L. Johanson and Éva Á. Csató (eds.) (1998). 138-157.
Georg, S. (2003) Ordos. In J. Janhunen (ed.) (2003). 193-209.

Göksel, A. and C. Kerslake (2005) *Turkish: A Comprehensive Grammar*. New York: Routledge.
Gülensoy, T. (2007) Türkiye türkçesindeki türkçe sözcüklerin köken bilgisi sözlüğü. Ankara: Türk dil kurumu.
Hahn, Reinhard F. (1998) Uyghur. In L. Johanson and Éva Á. Csató (ed.) (1998). 379-402.
Haspelmath, M. et al. (2005) *World Atlas of Language Structures*. Hong Kong: Oxford Univ. Press.
廣瀬幸生 (1997)「第 I 部 人を表すことばと照応」中右実（編）『日英語比較選書④ 指示と照応と否定』1-89. 東京：研究社出版
Hirose, Yukio (2000) Public and private self as two aspects of the speaker: A contrastive study of Japanese and English. *Journal of pragmatics* 32: 1623-1656.
廣瀬幸生 (2005)「話者指示の領域と視点階層」『文藝言語研究・言語篇』47: 45-67.
平田一郎他 (2016)『徹底比較 日本語文法と英文法』畠山雄二（編） 東京：くろしお出版
庵功雄 (2001)『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』東京：スリーエーネットワーク
Janhunen, J. (2003) *The Mongolic languages*. New York: Routledge.
Johanson, L. and Éva Á. Csató (eds.) (1998) *The Turkic languages*. New York: Routledge.
Kajdarov, A. T. (1966) Ujgurskij (novoujgurskij) jazyk. In V. V. Vinogradov i dr. (eds.) (1966). 363-386.
亀井孝・河野六郎・千野栄一（編） (1996)『言語学大辞典 第 6 巻 術語編』東京：三省堂
風間伸次郎 (2007)『ナーナイの民話と伝説 10』ツングース言語文化論集 36. 札幌：北海道大学
風間伸次郎 (2014)「日本語の類型について ―「アルタイ型言語」の解明を目指して―」北海道大学大学院文学研究科 北方言語ネットワーク(編)『北方言語研究』4: 157-171.
風間伸次郎 (2016)「地域的・類型論的観点からみた無生物主語について」北海道大学大学院文学研究科 北方言語ネットワーク(編)『北方言語研究』6: 81-110.
Kazama, S. (2010) *Udihe Texts 6.* Publications on Tungus languages and cultures 47. Fuchu: Research institute for languages and cultures of Asia and Africa, Tokyo university of foreign studies.
河内良弘 (1996)『満州語文語文典』京都：京都大学学術出版会
金田一春彦 (1988)『日本語 新版（下）』東京：岩波新書
Kirchner, M. (1998a) Kazakh and Karakalpak. In L. Johanson and Éva Á. Csató (ed.) (1998). 318-332.
Kirchner, M. (1998b) Kirghiz. In L. Johanson and Éva Á. Csató (ed.) (1998). 344-356.
König, E. and P. Siemund (with S. Töpper) (2005) Intensifiers and Reflexive pronouns. *WALS*. 194-197
Kullmann, R. and D. Tserenpil (1996) *Mongolian Grammar*. Hong Kong. Jenso. ltd.
久野暲 (1978)『談話の文法』東京：大修館書店
李翊燮・李相億・蔡琬 (2004)『韓国語概説』梅田博之監修・前田真彦訳 東京：大修館書店
李樹蘭・仲謙（編著）(1986)『錫伯語簡志』北京：民族出版社
中右実 (1997)「はしがき」中右実（編）『日英語比較選書④ 指示と照応と否定』v-vi. 東京：

研究社出版
Nedjalkov, I. (1997) *Evenki*. (Routledge Descriptive Grammar). London / New York: Routledge.
日本語記述文法研究会（編）(2009)『現代日本語文法 7 第 12 部 談話・第 13 部 待遇表現』東京：くろしお出版
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編） (2001)『日本国語大辞典 第二版』第六巻 東京：小学館
小沢重男 (1983)『現代モンゴル語辞典』東京：大学書林
佐藤暢治 (2017)「保安語積石山方言の三人称代名詞」『日本言語学会 第 155 回大会 予稿集』81-86.
柴谷方良 (1978)『日本語の分析』東京：大修館書店
Schönig, C. (1998a) Azerbaijanian. In L. Johanson and Éva Á. Csató (eds.) (1998). 248-260.
Schönig, C. (1998b) Turkmen. In L. Johanson and Éva Á. Csató (eds.) (1998). 261-273.
Schönig, C. (1998c) South Siberian Turkic. In L. Johanson and Éva Á. Csató (eds.) (1998). 403-416.
Skirbnik, E. (2003) Buryat. In J. Janhunen (ed.) (2003). 102-128.
Sohn, Ho-Min (1999) *The Korean language*. New York: Cambridge University Press.
Stachowski, M. and A. Menz (1998) Yakut. In L. Johanson and Éva Á. Csató (eds.) (1998). 417-433.
竹内和夫 (1989)『トルコ語辞典』東京：大学書林
トルヒナ アンナ (2012)「再帰代名詞のこれまでとこれから―束縛原理の背景と展開―」『一橋大学国際教育センター紀要』 3: 67-81.
Tsintsius, V. I. i dr. (1975) *Sravnitel'nyj slovar' tunguso-man'chzhurskikh jazykov, Materialy k etimologicheskomu slovarju. tom 1*. Leningrad: Nauka.
Tsumagari, T. (2003) Dagur. In J. Janhunen (ed.) (2003). 129-153.
角田太作 (2009)『世界の言語と日本語 改訂版』東京：くろしお出版
梅谷博之 (2003)「モンゴル語の二人称所属接辞」『東京大学言語学論集』22: 209-232.
梅谷博之 (2008)『モンゴル語の使役接辞-UUL と受身接辞の意味と構文』博士論文. 東京大学
Weiers, M. (2003) Moghol. In J. Janhunen (ed.) (2003). 248-264.
山越康裕 (2012)『詳しくわかるモンゴル語文法』東京：白水社
油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎（編） (1993) 『朝鮮語辞典』 東京・ソウル：日本・小学館 韓国・金星出版社共同編集

資料

de Saint Exupéry, Antoine (2001) *Küçük Prens*. （*Le petit prince*. の Fatih Erdoğan によるトルコ語訳）İstanbul Mavıbulut: Yayıncılık
de Saint Exupéry, Antoine (2001) *Bjacxan Xuntajž*. （*Le petit prince*. の Cegmidijn Süxbaatar によるモンゴル語訳）Ulaanbaatar: Comorlig xevlel XXK.
de Saint Exupéry, Antoine (2002) *Erin wangca*. （*Le petit prince*. の Kyeng-Mi Kim による朝鮮語訳）Sewul: Chaekmantununcip.
de Saint Exupéry, Antoine (1962)『星の王子様』（*Le petit prince*. の内藤濯による日本語訳）東京：岩波書店

A Contrastive Study of the “Reflexive Pronouns”
among Altaic languages, Korean and Japanese

Shinjiro KAZAMA
(Tokyo University of Foreign Studies)

In the present paper I examined the “reflexive pronouns” of Turkish, Mongolian, Nanai, Korean and Japanese by elicitation in order to reveal their range of function. The “reflexive pronouns” of these languages show such similarities and differences as seen below (Table 1). I proposed the hypothesis that these features are derived from the feature of the long-distance binding which these languages share.

Table 1: The contrastive analysis of the morphological and functional features of the reflexives pronouns among the contrasting languages

	Russian	Nanai	Mongolian	Turkish	Japanese	Korean
Regularity of the forms	○	×	○*	○*	○	○
Personal marking	×	×	○	○	×	×
Long-distance binding	×	○	○	○	○	○
Binding by oblique argument	×	×	○	○	○	○
Function as personal pronouns	×	×	○	○	○	◎
Usage for inanimate	×	×	○	○	×	×
Reciprocal function	○	×	×	×	×	×
Voice function	○	×	×	×	×	×

（かざま・しんじろう　kazamas@tufs.ac.jp）